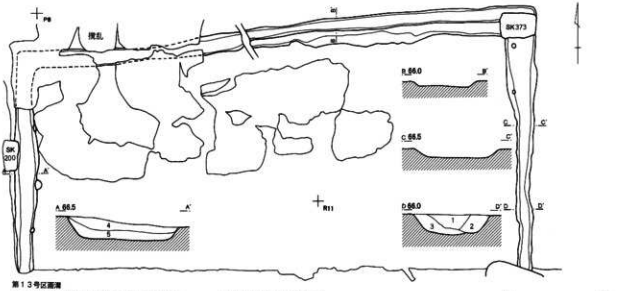
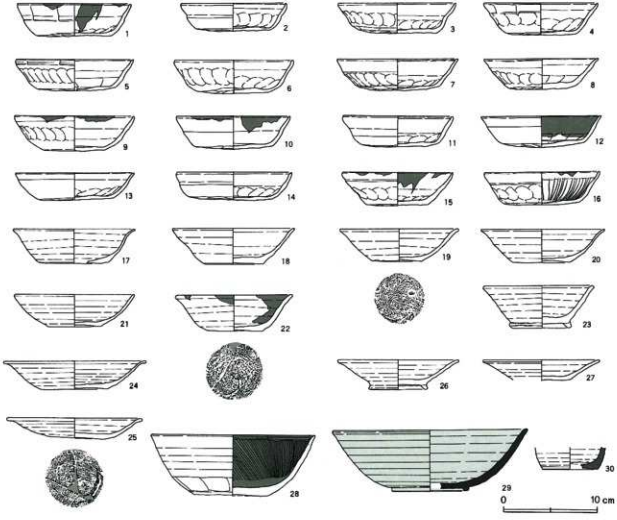
第618図　第13号区画溝・出土遺物（1）

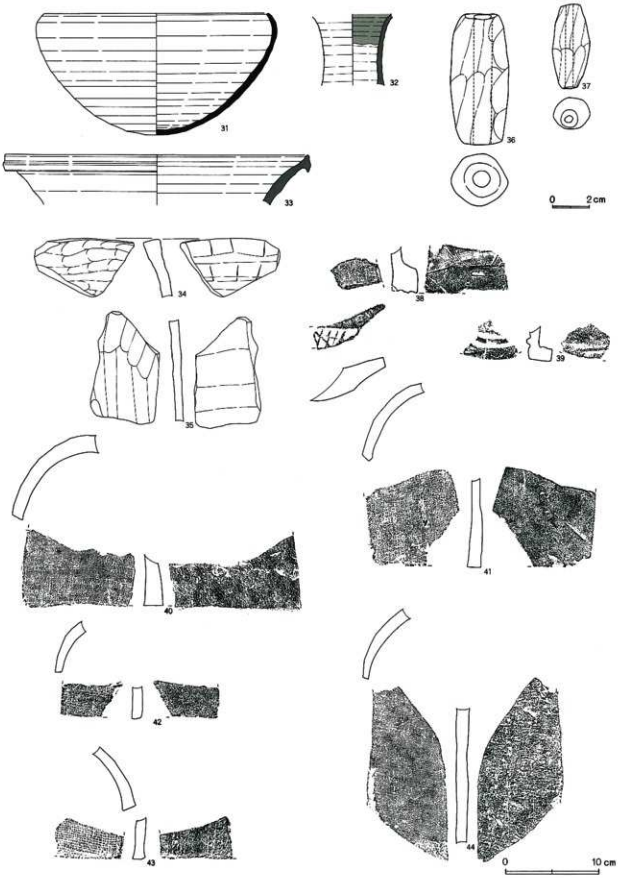


第１３号区画溝

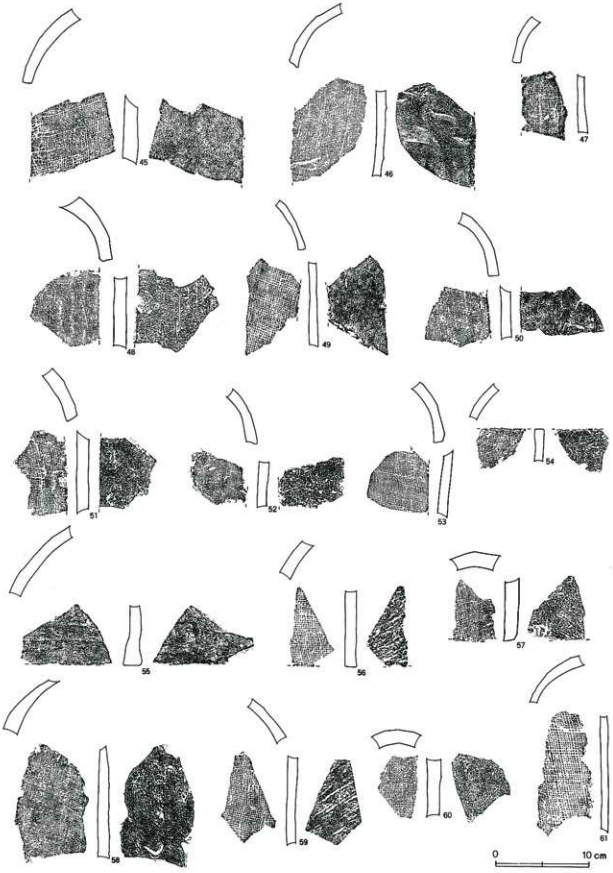
1　黒褐色土　焼土粒子を微量含み、礫を多量に含む
2　暗褐色土　焼土粒子を微量含み、礫を多量に含む
3　黒褐色土　焼土粒子を微量含み、礫を多量に含む
4　灰黄褐色土　焼土を微量含む
5　にぶい黄褐色土　焼土粒子、炭化粒子を微量に含む 粘性あり



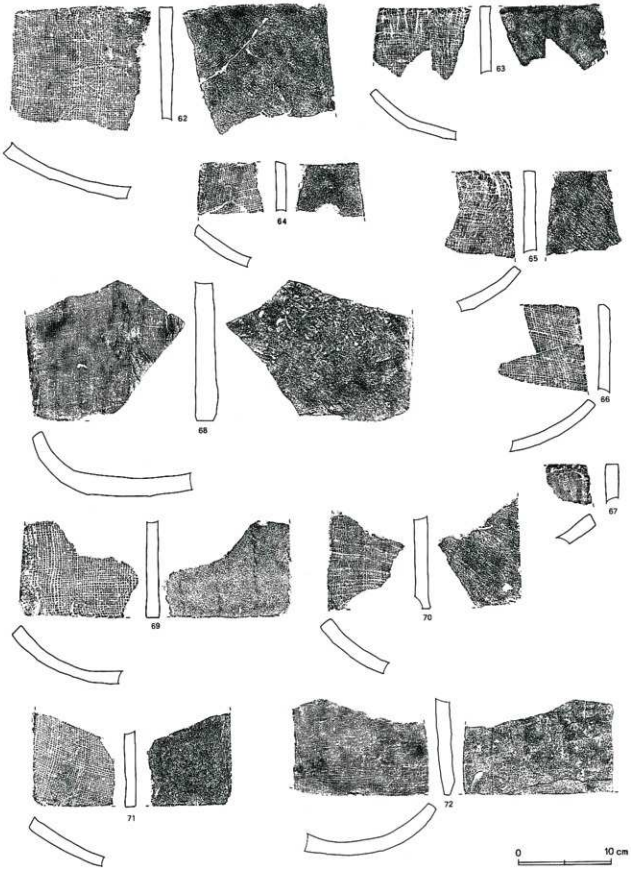
第619図　第13号区画溝出土遺物（2）



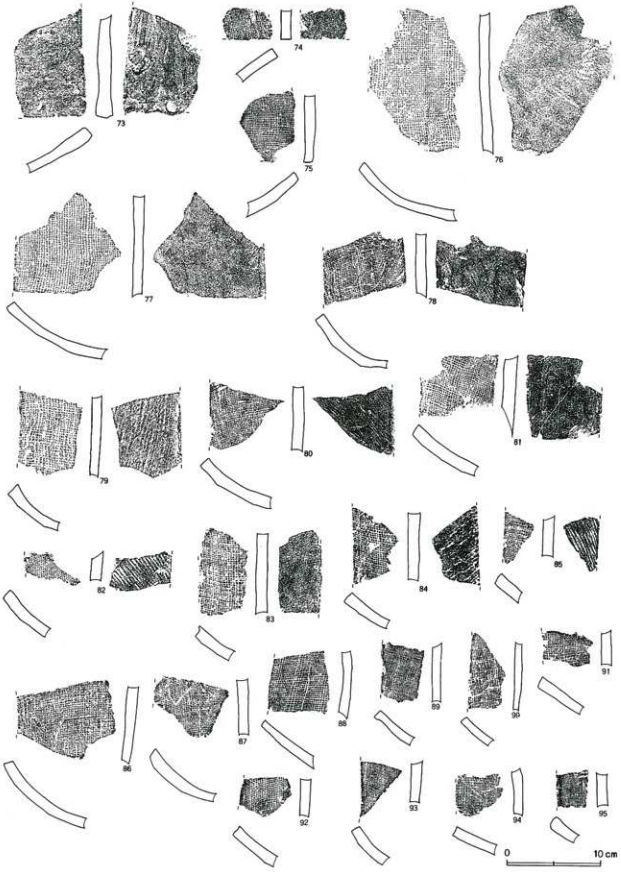
第620図　第13号区画溝出土遺物（3）



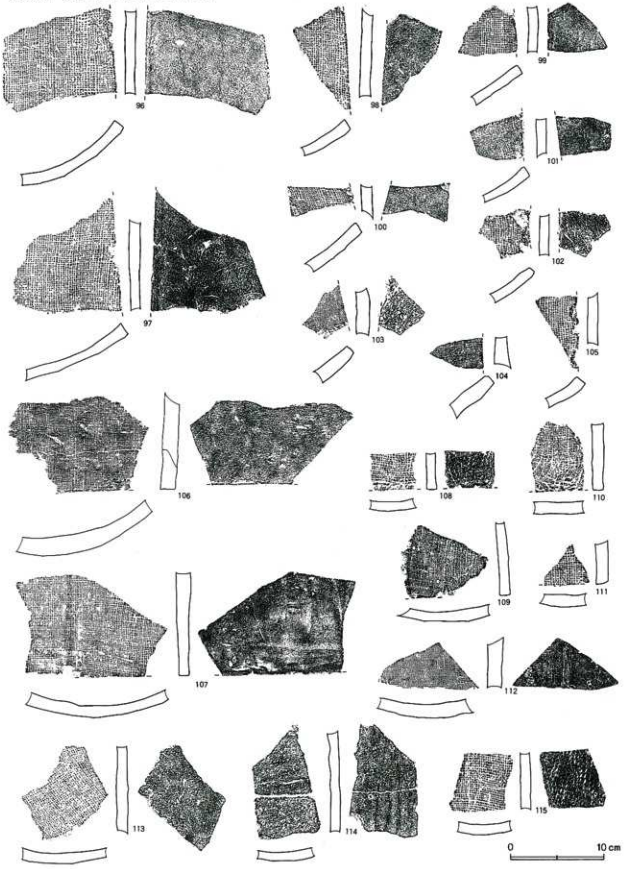
第621図　第13号区画溝出土遺物（4）



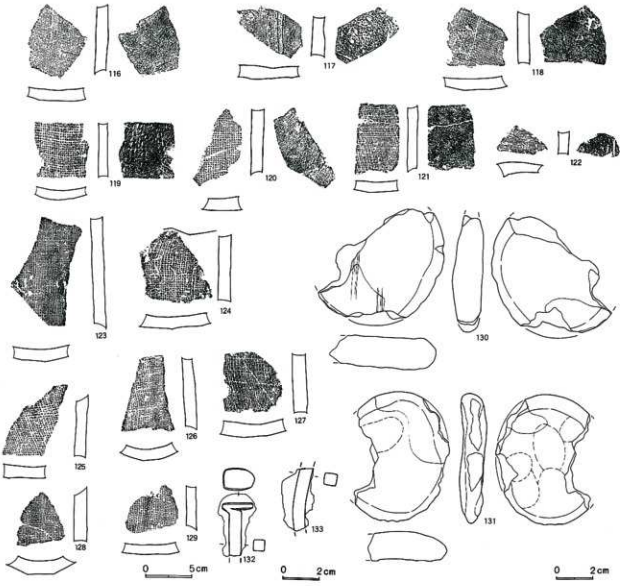
第622図　第13号区画溝出土遺物（5）



第623図　第13号区画溝出土遺物（6）



第624図　第13号区画溝出土遺物（7）



している。

85から90は、土錘である。80は黒色の付着物が口縁部内面に確認できる。煤の痕跡と考えられる。

91は、軒平瓦である。92から94は、丸瓦である。95から105は、平瓦である。

106は、砥石である。

107は、凝灰岩の切石である。

108・111から113・132は、釘である。109・108は楔、129は鎹の脚部、117は鉄塊である。他は棒状・板状の不明鉄製品であるが、119は鎖の一部の可能性がある。

第13号区画溝（第618図）

O－12・13、P－7・8・9・10・11・12・13、Q－7・8・13、R－7・13グリッドに確認した。

第1～3号建物地業跡を囲んでいた。南半部と北西部は、砂利採取の攪乱で破壊されていたが、ほぼ全容が確認できた。

南北方向（N－0°－E）に長さ23m、東西方向（N－81°－E）に長さ55m延びていた。幅は2.8m前後、深さ0.34m前後と、広く深い溝であった。

東西部は、第12号区画溝と4m～7.5mの距離を保

第476表　第13号区画溝出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏C	H	12.0	3.5		7.9	B, E, H	普通		茶褐	60	
2	坏A Ⅳ	H	11.2	3.0		7.8	B, D, E, H	普通		橙	40	R－13－3
3	坏A Ⅲ	H	12.5	3.2		7.2	B, E, H	普通		明橙	100	
4	坏A Ⅳ	H	12.0	3.4		6.7	B, E, H	普通		黄褐	80	
5	坏A Ⅳ	H	12.4	3.3		6.9	B, D, E, H	普通		暗黄褐	50	R－13－1
6	坏A Ⅳ	H	12.6	3.5		7.5	B, E, H	普通		橙	40	
7	坏A Ⅳ	H	12.9	3.3		6.2	B, E, H	普通		黄橙	70	
8	坏A Ⅳ	H	12.1	3.3		6.1	B, E, H	普通		橙	70	R－13－3
9	坏A Ⅴ	H	12.6	3.7		6.5	B, E, H	普通		黄橙	60	
10	坏C	H	12.0	3.5		8.0	B, E, H	普通		黄橙	90	P－10
11	坏C	H	11.7	3.2		6.9	B, D, E, H	普通		橙	100	東西P－9
12	坏C	H	12.8	3.4		9.0	B, E, H	普通		黄橙	70	R－13－1
13	坏A Ⅳ	H	12.6	2.9		7.9	B, E, H	普通		橙	60	R－13－1
14	坏A Ⅳ	H	12.1	2.9		6.7	B, D, E, H	普通		橙	100	
15	坏A Ⅳ	H	11.7	3.5		6.6	B, E, H	普通		赤橙	50	
16	坏（暗文）	H	12.2	3.5		7.8	B, C, E	不良		黄橙	100	
17	椀	HS	12.8	3.6		6.5	B, C, I	普通		灰黄	60	
18	椀	HS	13.1	3.8		6.0	B, E, I	普通		黄灰	70	
19	椀	HS	12.6	3.4		5.3	B, I	良好		黄灰	75	
20	椀	HS	13.1	3.5		6.0	B, E, I	普通		浅黄	50	
21	椀	HS	12.6	3.4		5.7	B, E, I	良好		にぶい黄橙	25	R－13－1　集中区
22	椀	HS	12.2	3.8		5.9	B, E	良好		にぶい橙	100	
23	高台付椀	HS	11.5	4.5		5.8	B, C, E, G	普通		浅黄橙	60	
24	皿	NS	14.9	3.0		7.0	B, C, I	良好		灰黄	70	R－13－1　集中区
25	皿	NS	14.2	2.1		6.1	B, E, G	良好		黄灰	75	P－11－2　墨書
26	高台付皿	NS	12.8	3.1		6.0	B, E, I	良好		黄灰	40	
27	高台付皿	NS	12.3	2.8		5.4	B, D, E	良好		明褐	40	
28	高台付椀	黒色	17.4	7.1		7.3	B, E, G	良好		外－橙。内－褐灰	40	
29	高台付椀	M	20.1	6.6		7.5	B, C	良好		淡緑	30	
30	小瓶	K				5.8	B, D	良好		灰白	25	東区上層
31	鉄鉢	S	23.9	12.8		2.6	B, D, J	良好		灰白	25	P－10－2, P－11
32	甕	K	10.4				B, D	良好		灰白	15	P－13－1　被熱痕
33	長頸壺	K					B	良好		灰白	10	
34	鍋きカマド	HS					B, C, H	普通		黄橙	10	
35	鍋きカマド	HS					B, C, H	普通		黄橙	10	

って併走し、南北部へ（西側東側とも）は、第11・12・22号区画溝と併走することから、これらの溝とともに区画を構成していたと推定した。

遺構の切り合い関係は、第200・373号土壙より古かった。

第13号区画溝の西側から第1～3号建物地業跡にかかる建物に葺かれた瓦が多量に出土していた。

1から16は、土師器の坏である。3は、坏AⅢである。9は、坏AⅤである。16は、暗文土器である。1・10から12は、坏Cである。ほかは、坏AⅣである。1・9・10・15は口縁部、12・16は口縁部内面に黒色の付着物が確認できる。油煙の痕跡と考えられる。

17から22は、須恵器（HS）の椀である。23は、須恵器（HS）の高台付椀である。24・25は、須恵器（NS）の皿である。26・27は、須恵器（NS）の高台付皿である。17は底部、27は高台が欠損している。22は黒色の付着物が口縁部に確認できる。油煙の痕跡と考えられる。

28は、黒色土器の高台付椀である。29は、緑釉陶器の高台付椀である。28は高台、29は底部が欠損してい

第477表　第13号区画溝出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
36	にぶい橙	100	7.0	3.0	0.9	72.1	A 1	I a	22	
37	橙	100	4.5	2.0	0.5	13.7	B 1	I a	75	

第478表　第13号区画溝出土瓦観察表

番号	種類	焼成	凸面	凹面	側面
40	丸瓦	還元炎	刷り消し	布	2面面取り
41	丸瓦	酸化炎	刷り消し	布	2面面取り
42	丸瓦	酸化炎	刷り消し	布	2面面取り
43	丸瓦	酸化炎	刷り消し	布	2面面取り
44	丸瓦	還元炎	刷り消し	布	1面面取り
45	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り
46	丸瓦	還元炎	刷り消し	布	1面面取り
47	丸瓦	中間	刷り消し	布	1面面取り
48	丸瓦	還元炎	刷り消し	布	1面面取り
49	丸瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り
50	丸瓦	還元炎	刷り消し	布	1面面取り
51	平瓦	還元炎	刷り消し	布	1面面取り
52	丸瓦	還元炎	刷り消し	布	−
53	丸瓦	還元炎	刷り消し	布	−
54	平瓦	還元炎	刷り消し	布	1面面取り
56	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り
57	丸瓦	還元炎	刷り消し	布 刷り消し	1面面取り
58	平瓦	還元炎	刷り消し	布	−
59	平瓦	酸化炎	縄タタキと刷り消し	布	−
60	丸瓦	還元炎	刷り消し	布	−
61	丸瓦	酸化炎	刷り消し	布	−
62	平瓦	還元炎	刷り消し	布	2面面取り
63	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	2面面取り
64	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	2面面取り
65	平瓦	還元炎	刷り消し	布	2面面取り
66	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	2面面取り
67	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	2面面取り
68	平瓦	還元炎	刷り消し	布	2面面取り
69	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	2面面取り
70	平瓦	還元炎	刷り消し	布	1面面取り
71	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	2面面取り
72	平瓦	中間	刷り消し	布	1面面取り
73	平瓦	酸化炎	刷り消し	刷り消し	2面面取り
75	平瓦	還元炎	刷り消し	布	1面面取り
76	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	−
77	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り
78	丸瓦	還元炎	刷り消し	布	1面面取り
79	平瓦	酸化炎	縄タタキと刷り消し	布	1面面取り
80	丸瓦	中間	刷り消し	布	1面面取り
81	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り
82	平瓦	酸化炎	平行タタキと刷り消し	布	1面面取り
83	平瓦	還元炎	刷り消し	布	1面面取り
84	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り
85	平瓦	還元炎	平行タタキと刷り消し	布	1面面取り
86	丸瓦	中間	刷り消し	布	1面面取り
87	丸瓦	還元炎	刷り消し	布	1面面取り
88	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り
89	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り
90	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り
91	平瓦	酸化炎	平行タタキと刷り消し	布	1面面取り
92	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り
93	丸瓦	還元炎	刷り消し	布	1面面取り
94	平瓦	還元炎	刷り消し	布	1面面取り
95	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	−
96	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り
97	平瓦	還元炎	刷り消し	布	1面面取り
98	平瓦	中間	刷り消し	布	1面面取り
99	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り
100	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り
101	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り
102	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り
103	平瓦	還元炎	刷り消し	布	1面面取り
104	平瓦	還元炎	刷り消し	布	1面面取り
105	平瓦	還元炎	刷り消し	布	−
107	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り
108	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り
109	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り
110	平瓦	還元炎	刷り消し	布	1面面取り
111	平瓦	還元炎	刷り消し	布	1面面取り
112	平瓦	還元炎	刷り消し	布	−
113	平瓦	還元炎	刷り消し	布	−
115	平瓦	酸化炎	縄タタキと刷り消し	布	−
116	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	−
117	平瓦	還元炎	刷り消し	布 刷り消し	−
118	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	−
119	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	−
120	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	−
121	平瓦	中間	刷り消し	布	−
123	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	−
124	平瓦	中間	刷り消し	布	−
125	平瓦	還元炎	刷り消し	布	−
126	丸瓦	還元炎	刷り消し	布	−
127	平瓦	中間	刷り消し	布	1面面取り
128	丸瓦	酸化炎	刷り消し	布	−
129	平瓦	還元炎	刷り消し	布	−

る。

30は、灰釉陶器の小瓶である。31は、鉄鉢模倣の須恵器（S）である。32は、灰釉陶器の長頸壺である。33は、灰釉陶器の甕である。30は底部のみ、32は頸部のみ、33は口縁部のみである。

34・35は、置きカマドである。34は掛け口破片である。35は胴部破片である。

36・37は、土錘である。

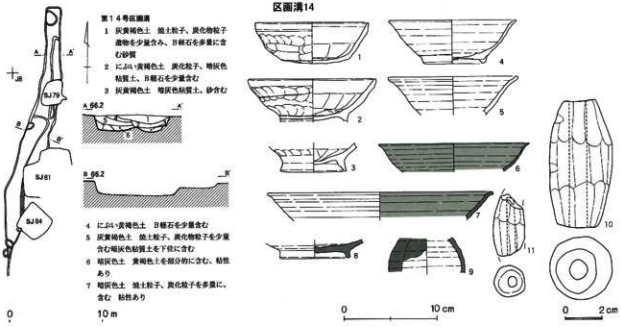
38は、軒平瓦である。39は、軒丸瓦である。40から61は、丸瓦である。62から129は、平瓦である。

130・131は、円盤状土製品である。

132は、釘である。

133は、棒状鉄製品である。

第625図　第14号区画溝・出土遺物（1）



第479表　第14号区画溝出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鋼	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A Ⅱ	H	12.0	4.4		6.1	B, D, E	普通		茶褐	100	砂
2	高台付坏	H	13.5				B, C, E, H	普通		橙	50	砂
3	高台付坏	H				6.1	B, C, E, G, H	普通		淡茶	20	
4	高台付椀	H S	13.4	4.6		6.0	B, E, G, I	普通		浅黄	80	K−8
5	高台付椀	H S	13.7				B, C, E, I	良好		橙	30	
6	高台付椀	K	15.7				D	良好		オリーブ灰	10	
7	高台付椀	K	18.7				B, D	良好		灰白	5	被熱痕
8	高台付皿	K				7.2	B, D	良好		灰白	25	
9	小瓶	K	4.0				B, D	良好		灰白	25	

第480表　第14号区画溝出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
10	褐灰	100	6.7	3.3	0.9	76.4	A 1	Ⅰa	23	
11	にぶい橙	30		1.7	0.4	7.9	C 1	Ⅲb	212	

第14号区画溝（第625図）

Ⅰ・J－8、K－7・8グリッドに確認した。

第12号区画溝と第16号区画溝の交点の北側から、北東方向（N－13°－E）に緩く蛇行しながら延びていた。長さ27.3m・幅2.7m・深さ0.23mと広くやや浅かった。

第23・24号溝と併走していた。また第14号区画溝は、土層断面の観察から掘り直しがあったと判断した。

遺構の切り合い関係は、第79・81・84号住居跡より古く、第12号区画溝より新しかった。

1は、土師器の坏AⅡである。2・3は、土師器の高台付坏である。4・5は、高台付椀である。3は口縁部、5は底部が欠損している。

6・7は、灰釉陶器の高台付椀である。8は、高台付皿である。9は、灰釉陶器の小瓶である。6・7は底部が欠損している。8は底部のみ、9は体部のみである。

10・11は、土錘である。

12は、鉄鏃である。13は、鉄製の方形金具である。

第15号区画溝（第627図）

K－8・9・10・11グリッドに確認した。

遺構の重複が激しく、確認に非常に手間取った。また検出は途切れ途切れであった。

第12号区画溝と第14号区画溝の交点から東の第18号区画溝に向かって北（N－93°－E）へ延びていた。長さ32m・幅1.5m・深さ0.23mとやや広く浅かった。

併走する第16号区画溝とは、5.3mの距離をおいていた。また、第12号区画溝が、ほぼ直角に曲がっていた。

遺構の切り合い関係は、第86・87・104・105・107・108・109号住居跡、第273・293号土壙より古かった。

図示できるほどの遺物は出土していない。

第16号区画溝（第628図）

L－7・8・9・10・11グリッドに確認した。

第16号区画溝は、第12号区画溝と第14号区画溝の交点の南側から始まり、第17号区画溝に向かって（N－90°－E）東に延びていた。長さ34.1m・幅3m・深さ0.26mと幅広く浅かった。

第15号区画溝と幅5.3mの距離をもって併走し、第12号区画溝と直交していた。

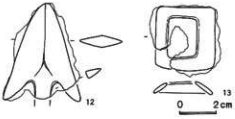
遺構の切り合い関係は、第110・111・113号住居跡よりも古かった。第12号区画溝との重複関係は明らかにできなかったが、同時に存在していたと判断した。

1は、須恵器（NS）の椀である。2は、須恵器（NS）の高台付椀である。3から5は、須恵器（HS）の高台付椀である。4は底部が欠損している。2は内外面に黒色処理が施されている。

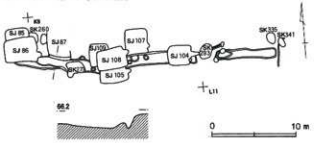
6は、灰釉陶器の把手付長頸壺である。7・8は、須恵器（HS）の羽釜である。9は、灰釉陶器の手付瓶である。6は胴部上位のみである。7は胴部上位以下、8は胴部中位以下が欠損している。9は底部のみである。

10・11は、土錘である。

第626図　第14号区画溝出土遺物（2）



第627図　第15号区画溝



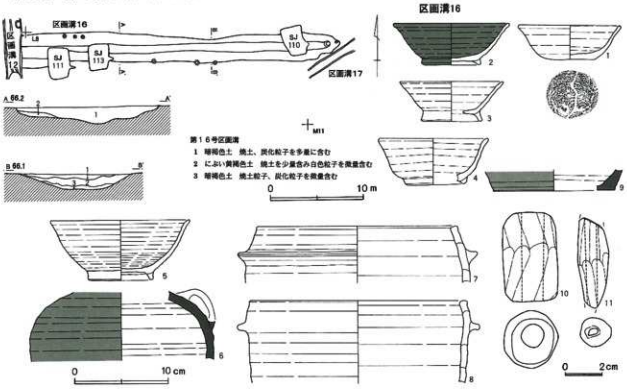
第17号区画溝（第629図）

K－11・12、L－9・10・11・12、M－8・9・10、N－8グリッドに確認した。

第12号区画溝から北東に（N－61°－E）向かって延びていた。東端付近は、第19号区画溝と接し、第37号掘立柱建物跡の手前まで続いていた。長さ53.5m・幅1.0前後、深さ0.16mと狭く浅かった。

第31号溝と併走していたが、ほかに併走した溝や、直交した溝は検出できなかった。ただ、第16号区画溝は、接して途切れていた。

第628図　第16号区画溝・出土遺物



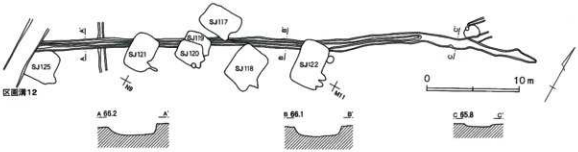
第481表　第16号区画溝出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	椀	NS	10.7	3.7		4.6	B, E, G	良好		灰白	60	
2	高台付椀	NS	12.1	4.4		5.7	B, E, G	良好		褐灰	25	
3	高台付椀	HS	10.8	4.2		6.0	B, C, E, I	普通		橙	25	
4	高台付椀	HS	11.5	5.0		5.9	B, E, G	良好		褐灰	60	
5	高台付椀	HS	14.8	6.3		6.5	B, E, G	良好		灰黄	20	
6	把手付長頸壺	K					B, D	良好		外－オリーブ灰。内－灰白	5	
7	羽Ｂ Ｉ	HS	21.1		2.9		B, C, E, H	良好		褐灰	10	
8	羽ＡⅡｂイ	HS	22.7		2.9		B, E, G	普通		浅黄橙	15	
9	手付瓶	K				12.9	B, D	良好		外－オリーブ灰。内－灰白	5	

第482表　第16号区画溝出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
10	橙	100	4.7	3.0	1.3	41.9	A 1	Ｉa	24	
11	褐灰	70		1.7	0.6	10.1	C 1	Ｖc	213	

第629図　第17号区画溝



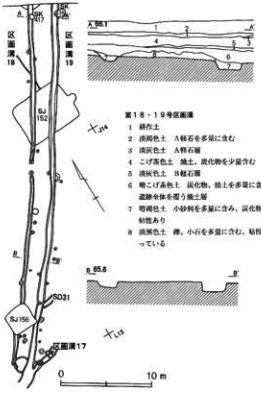
遺構の切り合い関係は、第117～122・125号住居跡より古かった。また第12号区画溝との重複関係は明らかにできなかった。

第18号区画溝（第630図）

H・I－13・14、J－12・13、K－11・12グリッドに確認した。

第17号区画溝と第19号区画溝の交点の北から北東（N－31°－E）に向かって延び、第33号掘立柱建物跡の付近で一度途切れ調査区外へと延びていた。長さは39.3m・幅0.4m・深さ0.1mと狭く浅かった。

第630図　第18・19号区画溝



南端は、第15号区画溝にほぼ接していた。第19号区画溝とは、2.3mの距離をもって併走していたことから、第18・19号区画溝は、道路の側溝と推定した。この道路の東側に第34号掘立柱建物跡や畝状遺構を検出した。

第19号区画溝（第630図）

H－14、I－13・14、J－12・13、K－12グリッドに確認した。

第19号区画溝は、第17号区画溝の東端から、北東（N－35°－E）に向かって延びていた。第18号区画溝と2.3mの距離をもって併走し、道路の東側溝と推定した。長さは39.7m・幅0.6m・深さ0.14mと狭く浅かった。南端は、第17号区画溝と合流していた。

第18・19号区画溝を側溝とした道路は、第17・16号区画溝と接するところで途切れていた。

遺構の切り合い関係は、第156号住居跡より古く、第152号住居跡より新しかった。

第20号区画溝（第631図）

M－13・14・15・16、N－12・13・14グリッドに確認した。

第20号区画溝は、第12号区画溝の東への延長上に東（N－71°－E）へ向かって延びていた。しかし調査区外の部分の存在から、第12号区画溝との関係は明らかにできなかった。また遺構の重複が激しく、確認に非常に手間取った。

長さ34.7m・幅3.3m・深さ0.22mと広く浅かった。

第21号区画溝と5.5mの距離をもって併走し、第12号区画溝の東西溝や第23・24号区画溝と併走していた。

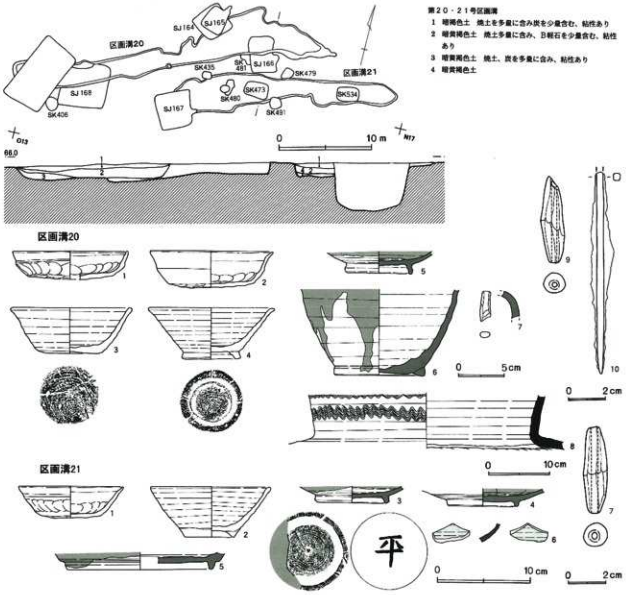
遺構の切り合い関係は、第164・165・168号住居跡より古く、第166号住居跡、第481号土壙より新しかった。

1・2は、土師器の坏ANである。1は底部が欠損している。

3は、須恵器（NS）の椀である。4は、須恵器（HS）の高台付椀である。

5は、灰釉陶器の高台付椀である。6は、灰釉陶器

第631図　第20・21号区画溝・出土遺物



の長頸壺である。7は、灰釉陶器の手付瓶（把手）である。5は底部のみである。6は胴部中位以上が欠損している。

8は、須恵器（S）の大甕である。頸部のみである。

9は、土錘である。

10は、棒状鉄製品である。

第21号区画溝（第631図）

M－14・15・16、N－14・15グリッドに確認した。

第20号区画溝の南側に接し、第167号住居跡から東（N－74°－E）に向かって延びていた。長さ23.8m・幅3m・深0.22mと広く浅かった。

第20号区画溝と5.5mの距離をもって併走し、第12号区画溝の東西溝、第23・24号区画溝と併走していた。

遺構の切り合い関係は、第167号住居跡、第473・480・491・534号土壙より古かった。

1は、土師器の坏AⅣである。

2は、須恵器（HS）の高台付椀である。3・4は、灰釉陶器の高台付皿である。3は底部外面に墨書「平」がみられる。5は、灰釉陶器の手付瓶か。6は、緑釉陶器の高台付椀である。3から5は底部のみである。6は体部破片である。

7は、土錘である。

第483表　第20号区画溝出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	軸釉	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A Ⅳ	H	12.1	3.0		9.0	B, E, H	普通		黄橙	20	
2	坏 A Ⅳ	H	13.0	3.9		6.8	B, E, H	普通		黄橙	30	
3	椀	N S	12.6	4.8		5.4	B, E, G	普通		灰黄	70	N－13
4	高台付椀	H S	13.2	5.4		5.8	B, E, G	良好		黄灰	50	
5	高台付椀	K				6.7	B	良好		灰白	25	M－15 被熱
6	長頸壺	K				9.4	B, D	良好		灰白	80	M－15
7	手付瓶（把手）	K					B, D	良好		オリーブ灰		N－12
8	大甕	S					B	普通				

第484表　第20号区画溝出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
9	にぶい橙	90	4.5	1.2	0.3	4.1	C 2	Ⅰc	553	

第485表　第21号区画溝出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	軸釉	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A Ⅳ	H	11.1	3.3		6.2	B, E, H	普通		黄橙	40	M－15
2	高台付椀	H S	12.8	5.3		4.8	B, E, I	良好		黄灰	80	N－13
3	高台付皿	K				7.2	B	良好		灰白	70	墨書
4	高台付皿	K				6.8	B, D	良好		灰白	30	M－15－3
5	手付瓶か	K				15.5	B, D	良好		灰白	20	M－15－3 被熱?
6	高台付椀	M					B	普通		淡緑	5	

第486表　第21号区画溝出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
7	橙	100	4.7	1.3	0.3	6.8	C 2	Ⅰa	554	

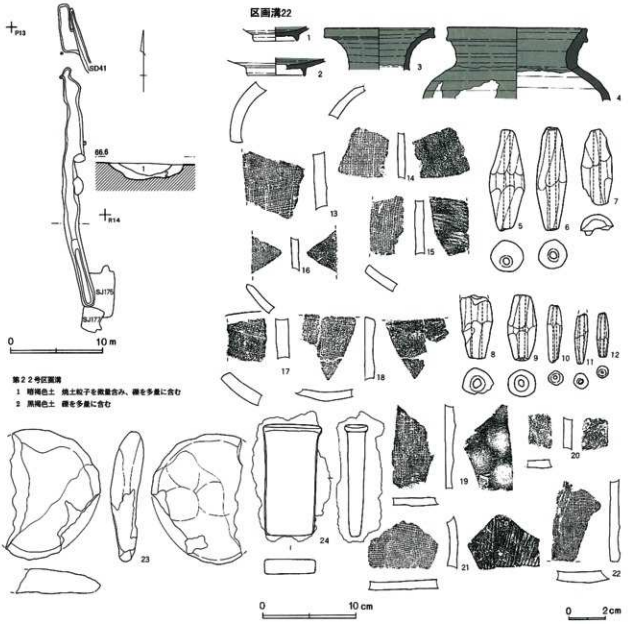
第22号区画溝（第632図）

O・P・Q・R−13グリッドに確認した。

第12号区画溝の西隅から南（N−5°−W）に向かって延びていた。途中途切れるものの長さ32.2m・幅1.6m・深さ0.26mをとり、やや広く浅かった。

第13号区画溝の南北方向と4mの距離をもって併走

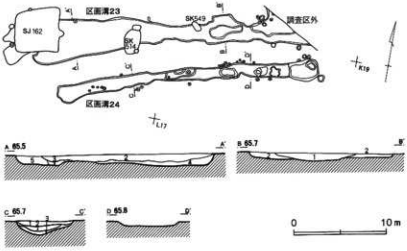
第632図　第22号区画溝・出土遺物



第487表　第22号区画溝出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鉢	底径	胎土	焼成	軸釉	色調	残存	出土位置その他
1	高台付椀	K				4.5	D	良好		外−灰白。内−オリーブ灰	100	Q−13−2, 4
2	高台付皿	K				6.0	B, D	良好		灰白	80	Q−13−2
3	長頸壺	K	11.6				D	良好		灰白	20	Q−13−2
4	甕	K	14.5				B, D	良好		灰白	20	Q−13−2

第633図　第23・24号区画溝・出土遺物



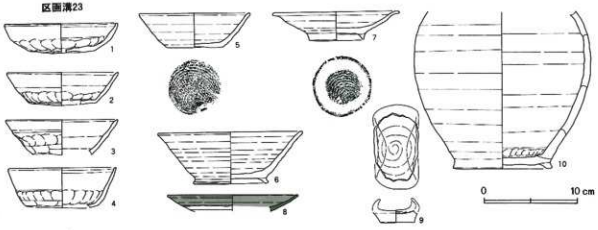
第23号区画溝　A－A'　B－B'

1　暗褐色土　焼土、炭化物を少量含み、B軽石を含む
2　褐色土　焼土、炭化物を微量に含み、B軽石を含む
3　黒褐色土　焼土、炭を少量に含み微を少量含み、B軽石を含む、粘性あり
4　黒褐色土　焼土、炭を多量に含む、粘性あり
5　暗褐色土　砂利、焼土、炭を少量含む

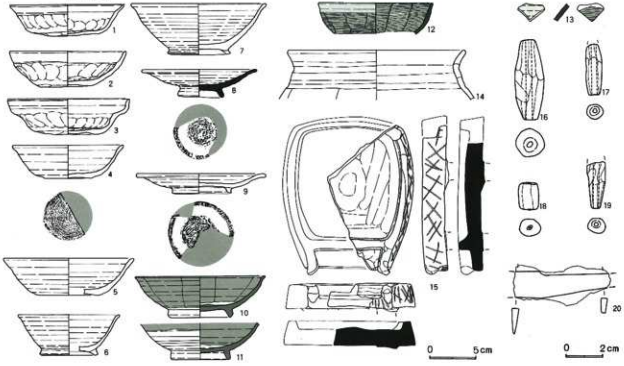
第24号区画溝　C－C'

1　暗黄褐色土　焼土、白色粒子を少量含む、粘性あり
2　暗黄褐色土　焼土を少量含む
3　暗黄褐色土　粘性あり

区画溝23



区画溝24



第488表　第22号区画溝出土土師器観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
5	橙	100	5.3	1.7	0.4	11.6	C 1	Ⅰa	214	
6	橙	100	5.5	1.5	0.4	10.8	C 1	Ⅰa	215	
7	浅黄橙	30				5.4	C 1	Ⅶ	216	
8	にぶい黄橙	40		1.7	0.5	6.4	C 1	Ⅳa	217	
9	浅黄橙	100	3.5	1.5	0.3	7.5	C 1	Ⅰa	218	
10	浅黄橙	100	3.1	0.8	0.2	1.5	C 2	Ⅰa	219	
11	にぶい赤褐	60		0.8	0.2	1.1	C 2	Ⅰb	555	
12	にぶい赤褐	100	2.3	0.6	0.1	0.7	C 2	Ⅰb	556	

第489表　第22号区画溝出土瓦観察表

番号	種類	焼成	凸面	凹面	側面	番号	種類	焼成	凸面	凹面	側面
13	丸瓦	酸化炎	刷り消し	布	－	17	丸瓦	酸化炎	刷り消し	布	－
14	丸瓦	酸化炎	刷り消し	布	－	18	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り
15	平瓦	酸化炎	平行タタキと刷り消し	布	1面面取り	19	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	－
						20	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り
16	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り	21	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	－

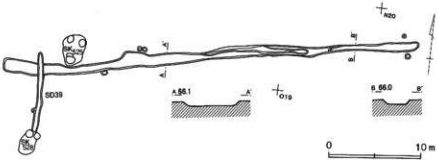
第490表　第23号区画溝出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鐸	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏A Ⅳ	H	11.9	3.1		7.1	B, E, H	普通		橙	40	K－15
2	坏A Ⅳ	H	11.8	3.5		6.8	B, E, H	良好		黄褐	20	K－16
3	坏A Ⅴ	H	11.8				B, E, H	普通		暗赤褐	20	J－18
4	坏A Ⅴ	H	11.4	4.2		7.6	B, E, H	普通		暗橙	20	K－16
5	椀	N S	11.9	3.7		6.2	B, G	良好		灰黄	50	K－15
6	高台付椀	H S	15.3	5.4		7.3	B, E, I	良好		にぶい橙	20	K－16
7	高台付椀	N S	13.2	3.0		5.6	B, I	良好		灰黄	40	K－16
8	高台付皿	K	13.8				B, D	良好		灰白	10	J－18
9	耳皿	H S					B, E, G, H	良好		淡灰	60	K－15
10	長頸壺	N S				9.7	B, E, H	普通		灰白	40	K－15, 16

第491表　第24号区画溝出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鐸	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏A Ⅳ	H	12.0	3.3		7.2	B, E, H	普通		黄橙	20	K－18
2	坏A Ⅳ	H	12.3	3.8		5.5	B, E, H	普通		黄橙	50	K－18
3	坏A Ⅳ	H	12.9	3.8		7.3	B, E, H	普通		こげ茶	50	
4	椀	N S	11.8	3.5		5.0	B, E	普通		灰白	50	
5	椀	H S	13.8	3.9		6.8	B, E, I	普通		にぶい黄橙	30	K－18
6	高台付椀	H S	10.5	4.3		4.5	B, E, G	普通		にぶい黄橙	20	K－16
7	高台付椀	N S	14.5	5.4		5.9	B, C, E	良好		灰白	25	K－17
8	高台付皿	S	12.1	2.9		4.3	B	良好		灰	95	
9	高台付皿	N S	13.6	2.1		6.3	B, C	良好		黄灰	50	R－16
10	高台付椀	K	13.7	4.4		6.2	B, D	良好		灰オリーブ	40	
11	高台付椀	K				5.8	B	良好		外－灰白。内－オリーブ灰	25	
12	高台付椀	M	11.9				B	良好		黄緑	10	
13	高台付椀	M					B	普通		淡緑		
14	土師甕BⅡa	H	18.8				B, C, E, H	良好		橙	10	
15	風字硯	S					B, D, E	良好		青灰	40	

第634図　第25号区画溝



第24号区画溝と5ｍの距離をもって併走し、第12・20・21号区画溝、第38号溝、第10・12・13・14柵列跡と平行していた。特に第24号区画溝との間は、道路として使用していたと推定した。

遺構の切り合い関係は、第162号住居跡、第514・549号土壙より古かった。

し、第1～3号建物地業跡を囲む区画の一部を構成していたと推定した。また第13号区画溝との間も道路として使用していたものと推定した。

遺構の切り合い関係は、第175・177号住居跡より古かった。

覆土中から第3号建物地業跡の建物に使用した瓦が出土した。

1は、灰釉陶器の高台付椀である。2は、灰釉陶器の高台付皿である。3は、灰釉陶器の長頸壺である。4は、灰釉陶器の甕である。1・2は底部のみ、3は口縁部のみである。4は胴部中位以下が欠損している。

5から12は、土錘である。

13・14は、丸瓦である。15から22は、平瓦である。

23は、鉄製の楔と考えられる。

第23号区画溝（第633図）

J－17・18、K－15・16・17グリッドに確認した。

周辺に遺構は、比較的疎らだったが、砂利層が確認面のため、確認作業は困難であった。第162号住居跡から東（N－77°－E）に向かって延び、調査区外に続いていた。長さ32.8ｍ・幅4.2ｍ・深さ0.19ｍと広く浅かった。

1・2は、土師器の坏AⅣである。3・4は、土師器の坏AⅤである。5は、須恵器（NS）の椀である。6は、須恵器（HS）の高台付椀である。7は、須恵器（NS）の高台付椀である。8は、灰釉陶器の高台付皿である。9は、須恵器（HS）の耳皿である。1から4・8は底部、9は耳が欠損している。

10は、須恵器（NS）の長頸壺である。胴部上位以上が欠損している。

第24号区画溝（第633図）

K－15・16・17、L－16グリッドに確認した。

第23号区画溝の南側に位置し、5ｍの距離をもって併走（N－74°－E）していた。

長さ28ｍ・幅1.3ｍ・深さ0.22ｍと第23号区画溝より幅はやや狭くやや深い。

溝底に不整形の浅い掘り込みを検出した。

遺構の切り合い関係は、みられなかった。

1から3は、土師器の坏AⅣである。

4は、須恵器（NS）の椀、5は、須恵器（HS）の椀である。6は、須恵器（HS）の高台付椀である。7・9は、須恵器（NS）の高台付椀である。8は、

第492表　第24号区画溝出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
16	にぶい褐	100	4.3	1.5	0.3	8.5	C1	Ⅰa	220	
17	にぶい橙	60		0.9	0.2	1.7	C2	Ⅱa	557	
18	にぶい橙	100	1.4	1.1	0.2	1.5	A2	Ⅶ	44	
19	橙	30		1.0	0.2	1.5	C2	Ⅲa	558	

須恵器（S）の高台付椀である。5・6は底部が欠損している。

10・11は、灰釉陶器の高台付椀である。12・13は、緑釉陶器の高台付椀である。11は口縁部、12は底部が欠損している。13は体部破片である。

14は、土師器の甕である。胴部中位以下が欠損している。

15は、須恵器（S）の風字硯である。

16から19は、土錘である。

20は、鉄製の刀子である。

第25号区画溝（第634図）

N－17・18・19・20、O－16・17グリッドに確認した。

第25～28号区画溝は、第54号掘立柱建物跡を中心に、東西・南北に延び、第54号掘立柱建物跡と深くかかる区画施設と推定した。

第25号区画溝の周辺は、比較的疎らだが、砂利層が確認面のため、確認作業は困難であった。

調査区のほぼ中央から東（N－81°－E）に向かって延び、第54号掘立柱建物跡の西側まで続いていた。長さ44.6m・幅1.3m・深さ0.07mと狭く非常に浅かった。

第54号掘立柱建物跡をはさんだ東側の延長上に第28号区画溝の東西溝は位置し、第26・27号区画溝と方形の区画を構成していたと推定した。

第26号区画溝（第635図）

K・L・N－20グリッドに確認した。

周辺は、遺構が比較的疎らだが、砂利層が確認面のため、また覆土に多量の川原石を含んでいたため調査は困難を極めた。

第54号掘立柱建物跡の西側から北（N－5°－W）に向かって延びていた。長さ22.4m・幅1.2m・深さ1.04m。コの字形の断面形で掘り込みは、幅が狭く非常に深かった。

南端は、第25号区画溝の西端に近接し、第27号区画溝と7.5mの距離をもって併走していた。

第493表　第26号区画溝出土瓦観察表

番号	種類	焼成	凸面	凹面	側面
1	軒平瓦	還元炎	瓔珞帯	布	－
2	丸瓦	酸化炎	刷り消し	布	－
3	丸瓦	酸化炎	刷り消し	布	－
4	丸瓦	還元炎	刷り消し	布	－
5	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り
6	平瓦	還元炎	刷り消し	布	2面面取り
7	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	2面面取り
8	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	2面面取り
9	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り
10	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り
11	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り
12	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り
13	平瓦	還元炎	刷り消し	布	－
14	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	－
15	平瓦	還元炎	刷り消し	布	－

軒平瓦を含む瓦が、覆土中から出土し、付近に瓦葺きの建物の存在を推定させる。

1は、軒平瓦である。2から4は、丸瓦である。5から15は、平瓦である。

第27号区画溝（第636図）

L・M－21グリッドに確認した。

砂利層が確認面であり、覆土に多量の川原石を含み、調査は困難を極めた。

南端は、第54号掘立柱建物跡の第15号柱穴に接し、北（N－5°－W）に向かって延びていた。長さ12.8m・幅2.7m・深さ0.7mとやや狭く深かった。

第26号区画溝とほぼ併走し、第54号掘立柱建物跡の南側、第28号区画溝の南北溝の延長線上にあった。

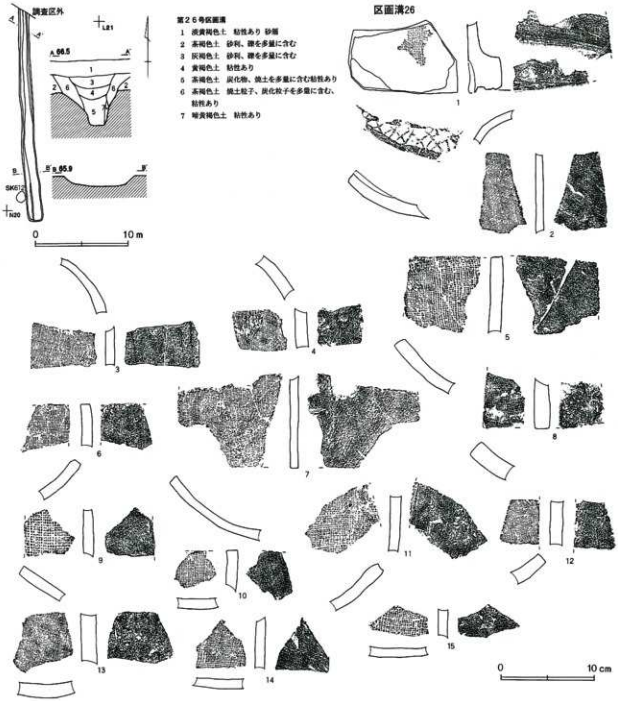
第28号区画溝（第637図）

N・Q－21・22・23、O・P－21グリッドに確認した。

第54号掘立柱建物跡の東側を大きく区画した溝である。東に開くコの字形の区画溝で、第54号掘立柱建物跡柱筋に沿って南東隅でクランク状に曲がっていた。

南北溝（N－6°－E）は、長さ30m、北側東西溝（N－81°－E）は、長さ19m、南側東西溝（N－86°

第635図　第26号区画溝・出土遺物



第494表　第28号区画溝出土遺物観察表

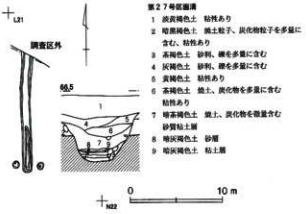
番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	機械	色調	残存	出土位置その他
1	高台付皿	K				6.0	B, G	良好		灰白	100	Q−23
2	高台付皿	K				7.0	B, D	良好		外−灰白。内−オリーブ灰	10	Q−23
3	高台付椀	M					D	普通		淡緑	5	
4	大甕	S					B	普通		青灰	5	Q−27

－E）は、長さ22ｍであった。東端は第62号掘立柱建物跡に接していた。溝の幅は、1.6ｍ前後、深さは0.62ｍ前後と狭く深かった。

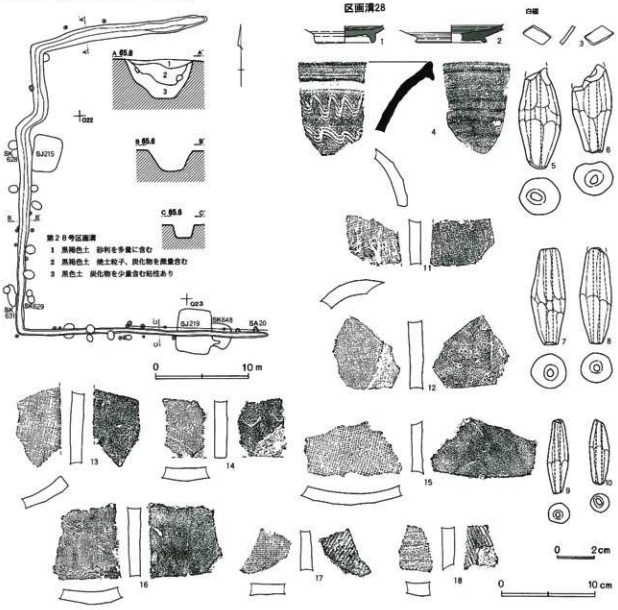
南北溝は、第27号区画溝の延長線上、北側東西溝は、第25号区画溝の延長線上にあたっていた。また南側の東西溝は、第29号区画溝と2.5ｍの距離をもって併走し、第62号掘立柱建物跡の梁行と平行していた。また北壁に接し、第20号柵列跡が併走しつつ東に向かって延びていた。

遺構の切り合い関係は、第215・219号住居跡、第55・

第636図　第27号区画溝



第637図　第28号区画溝・出土遺物



第495表　第28号区画溝出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
5	にぶい橙	90		2.2	0.6	17.2	C 1	I c	221	
6	にぶい橙	60		2.1	0.5	14.0	C 1	II b	222	
7	にぶい橙	100	5.1	1.9	0.3	14.6	C 1	I a	223	
8	橙	90		1.7	0.3	12.1	C 1	I b	224	
9	にぶい赤褐	100	4.0	1.1	0.3	3.9	C 2	I a	559	
10	橙	100	3.5	1.0	0.3	2.6	C 2	I c	560	

56・57号掘立柱建物跡、第648号土壙より新しかった。また第629号土壙と第631号土壙の間から、溝の窪みに石組みの墓壙が形成されていた。

覆土に軒平瓦を含む瓦が出土し、付近に瓦葺きの建物の存在を推定させた。

1・2は、灰釉陶器の高台付皿である。3は、白磁の高台付椀である。4は、須恵器（S）の大甕である。1・2は底部のみである。3は体部破片である。

5から10は、土錘である。

11・12は、丸瓦である。13から18は、平瓦である。

第29号区画溝（第638図）

Q－22・23・24・25・26・27、R－26・27グリッドに確認した。

第57号掘立柱建物跡から東（N－95°－E）に向かって延び、東端で第30号区画溝と重複していた。長さ53.4m・幅1m・深さ0.08mと狭く浅かった。

第28号区画溝の東西溝と2.5mの距離をもって併走し、また第20号柵列跡とも併走していた。

第496表　第28号区画溝出土瓦観察表

番号	種類	焼成	凸面	凹面	側面
11	平瓦	還元炎	刷り消し	布	1面面取り
12	丸瓦	還元炎	刷り消し	布	1面面取り
13	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り
14	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り
15	平瓦	中間	刷り消し	布	－
16	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	－
17	平瓦	酸化炎	平行タタキと刷り消し	布	1面面取り
18	平瓦	酸化炎	平行タタキと刷り消し	布	1面面取り

遺構の切り合い関係は、第238・239・241号住居跡、第686号土壙、第30号区画溝より新しかった。

第30号区画溝（第639図）

P・Q・R－27グリッドに確認した。

周辺の遺構は疎らだが、砂利層が確認面であったため、確認作業は困難であった。

第65号掘立柱建物跡の西側に位置し、南北（N－10°－W）に延びていた。長さ14.2m・幅1.2m・深さ0.35mと狭くやや深かった。

第31号区画溝と3.3mの距離をもって併走し、第65号掘立柱建物跡の梁行、第20号柵列跡の南北列と平行する。第31号区画溝との間は、道路として機能していたと推定した。

遺構の切り合い関係は、第29号区画溝より古かった。

第31号区画溝（第639図）

P－27、Q・R－27・28グリッドに確認した。

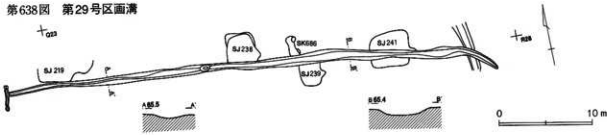
周辺の遺構は疎らだが、砂利層が確認面であり、覆土に川原石を多量に含み、調査は困難であった。

第30号区画溝の西側に位置し、南北（N－10°－W）に延びていた。長さ22.6m・幅1.8m・深さ0.23mと狭くやや深かった。溝底は浅く不整形に掘り込まれていた。

第30号区画溝と3.3mの距離をもって併走し、第65号掘立柱建物跡の棟行、第20号柵列跡の南北列と平行していた。

1は、灰釉陶器の高台付椀である。2は、灰釉陶器の高台付皿である。1は底部のみである。2は口縁部

第638図　第29号区画溝

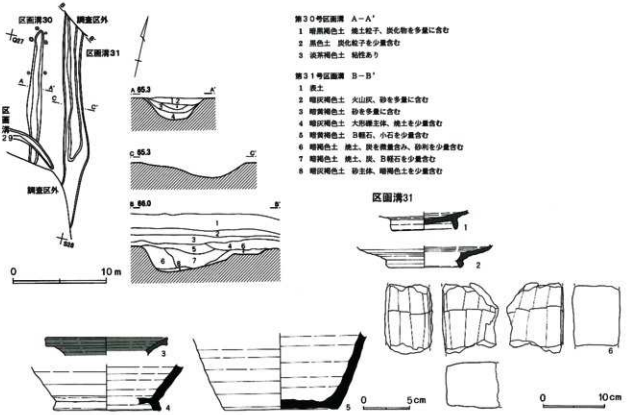


と底部が欠損している。

3は、灰釉陶器の長頸壺である。4・5は、須恵器（S）の長頸壺である。3は口縁部のみ、4は底部のみである。5は胴部中位以上が欠損している。

6は、凝灰岩の切石である。

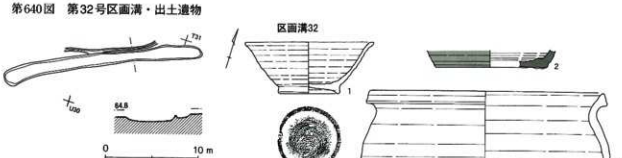
第639図　第30・31号区画溝・出土遺物



第497表　第31号区画溝出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鐸	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	高台付椀	K				6.8	B, D	良好		灰白	75	Q－27
2	高台付皿	K	18.0	3.0		7.5	D	良好		灰白	15	Q－27
3	長頸壺	K	12.8				D	良好		オリーブ灰	10	Q－27
4	長頸壺	S				11.2	B	良好		灰	5	Q－27
5	長頸壺	S				11.9	B	良好		灰	10	P－27

第640図　第32号区画溝・出土遺物



第498表　第32号区画溝出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	帯縄	色調	残存	出土位置その他
1	高台付椀	HS	13.4	5.5		6.0	B, E, I	良好		にぶい黄橙	50	T−30
2	手付瓶	K				11.8	B, D	良好		灰白	5	
3	鉢	HS	24.9				B, E, G	普通		浅黄橙	10	T−30

第32号区画溝（第640図）

T−29・30・31、U−29グリッドに確認した。

調査区の東端に位置し、東西（N−65°−E）に延びていた。長さ21.2m・幅1.5m・深さ0.08mとやや広く非常に浅かった。

第42号溝が、北壁に接してに併走し、南側は、御車場川の旧流路と平行していた。

第32号区画溝より南は、火葬墓1基を検出しただけである。第32号区画溝は、遺跡の東端を区切る施設と判断した。

1は、須恵器（HS）の高台付椀である。

2は、灰釉陶器の手付瓶である。底部のみである。

3は、須恵器（HS）の鉢である。胴部中位以下が欠損している。

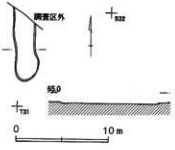
第33号区画溝（第641図）

R−30、S−30・31グリッドに確認した。

南端が第42号溝に接して位置し、北（N−0°−E）に向かってに延びていた。大部分は調査区外だが、長さ7.5m・幅2.1m・深さ0.02mと幅広く非常に浅かった。

第33号区画溝より東側は、遺構が検出できず、第32号区画溝とともに、遺跡の東端を区切る施設と判断した。

第641図　第33号区画溝



第1号溝（第642図）

D−2、E−1・2グリッドに確認した。

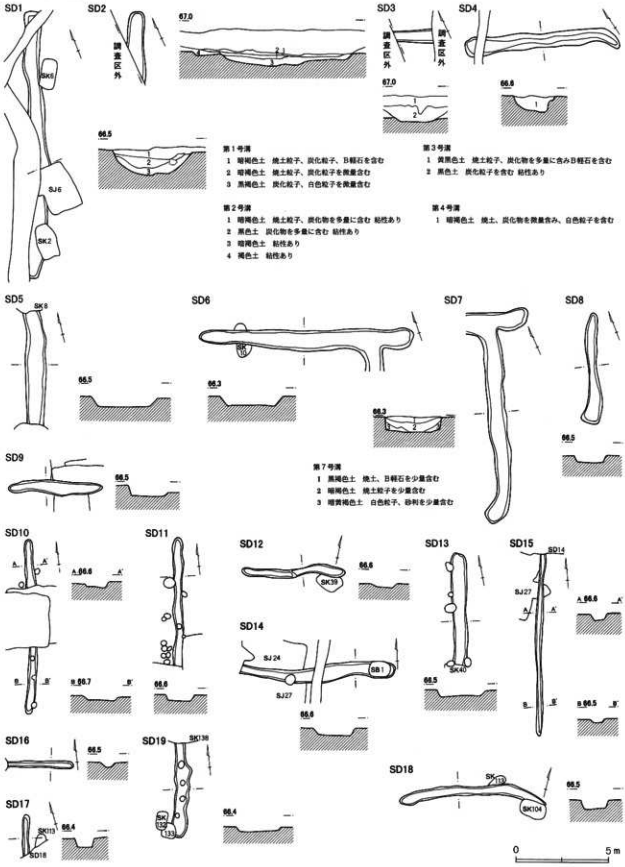
第1号区画溝の西側に位置し、第6号住居跡の西側から北（N−21°−E）に向かって延びていた。長さ14.3m・幅0.90m・深さ0.41mと狭く深かった。

第1号溝の延長線上に第2・5号溝が位置し、第1号区画溝と第7・8号溝も併走していた。

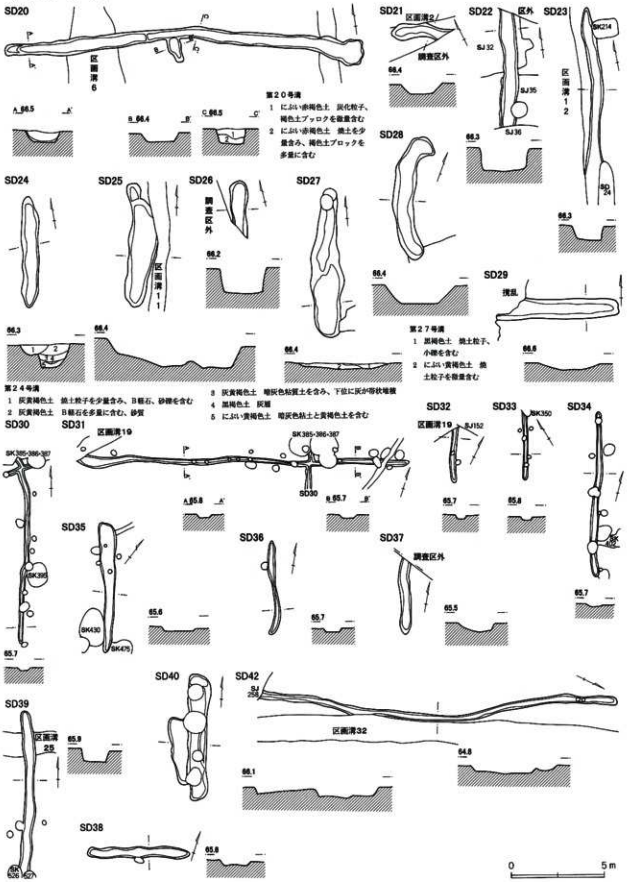
1は、土師器の坏AⅣである。

2・3は、須恵器（HS）の椀である。4は、須恵器（NS）の椀である。5は、須恵器（S）の椀である。6は、須恵器（HS）の皿である。7・8・10は、須恵器（HS）の高台付椀である。9は、須恵器（NS）の高台付椀である。11は、須恵器（HS）の高脚

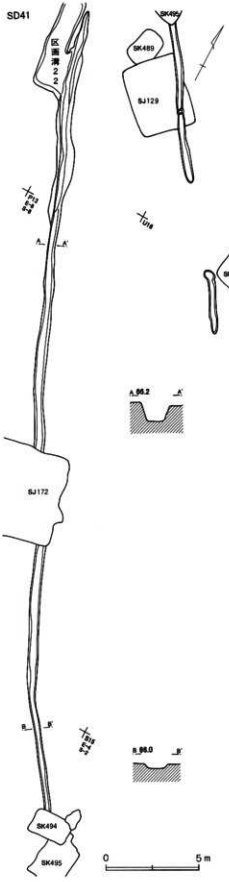
第642図　溝（1）


SD1
SD2
調査区外
67.0
66.5
SD3
調査区外
67.0
SD4
調査区外
66.6
第1号溝
1　暗褐色土　焼土粒子、炭化粒子、B軽石を含む
2　暗褐色土　焼土粒子、炭化粒子を微量含む
3　黒褐色土　炭化粒子、白色粒子を微量含む
第2号溝
1　暗褐色土　焼土粒子、炭化物を多量に含む　粘性あり
2　黒色土　炭化物を多量に含む　粘性あり
3　暗褐色土　粘性あり
4　褐色土　粘性あり
第3号溝
1　黄黒色土　焼土粒子、炭化物を多量に含みB軽石を含む
2　黒色土　炭化粒子を含む　粘性あり
第4号溝
1　暗褐色土　焼土、炭化物を微量含み、白色粒子を含む
SJ6
SK2
SD5
SK8
65.5
SD6
SK10
66.3
SD7
SD8
66.5
SD9
66.5
第7号溝
1　黒褐色土　焼土、B軽石を少量含む
2　暗褐色土　焼土粒子を少量含む
3　暗黄褐色土　白色粒子、砂利を少量含む
SD10
A 66.6
B 66.7
SD11
66.0
SD12
SK39
66.6
SD13
SK40
66.5
SD15
SD14
SJ27
A 66.6
B 66.5
SD14
SJ24
SB1
SJ27
66.6
SD16
66.5
SD17
SK113
SD18
66.4
SD19
SK136
SK135
SK134
66.4
SD18
SK
SK104
66.5
0
5 m

第643図　溝（2）


SD20
区画溝6
A 66.5 A'
B 66.4 B'
C 66.5 C'
第20号溝
1 にぶい赤褐色土　炭化粒子、褐色ブロックを微量含む
2 にぶい赤褐色土　焼土を少量含み、褐色土ブロックを多量に含む
SD21
区画溝2
調査区外
66.4
SD22
区外
SJ32
SJ35
SJ36
66.3
SD23
SK214
区画溝12
SK234
66.3
SD24
66.3
1
2
3
4
SD25
区画溝1
66.4
SD26
調査区外
66.2
SD27
66.4
SD28
66.4
SD29
撹乱
66.6
第24号溝
1 灰黄褐色土　焼土粒子を少量含み、B軽石、砂礫を含む
2 灰黄褐色土　B軽石を多量に含む、砂質
3 灰黄褐色土　暗灰色粘質土を含み、下位に灰が帯状堆積
4 黒褐色土　灰層
5 にぶい黄褐色土　暗灰色粘土と黄褐色土を含む
第27号溝
1 黒褐色土　焼土粒子、小礫を含む
2 にぶい黄褐色土　焼土粒子を微量含む
SD30
SK385・386・387
SK385
SD31
区画溝19
SK385・386・387
SD30
A 65.8 A'
B 65.7 B'
SD32
区画溝19
SJ152
65.7
SD33
SK350
65.8
SD34
SK
65.7
SD35
SK430
SK475
65.6
SD36
65.7
SD37
調査区外
65.5
65.7
SD39
区画溝25
SK526
SK527
65.9
SD40
SD42
SK
区画溝32
66.1
64.8
SD38
65.8
0
5m

第644図　溝（3）



高台付椀である。12は、須恵器（ＮＳ）の高台付椀である。３は底部、12は口縁部が欠損している。10は黒色の付着物が外面口縁部から底部にかけて確認できる。油煙の痕跡と考えられる。

13・14は、灰釉陶器の高台付椀である。15は、灰釉陶器の高台付皿である。13は底部のみである。14・15は底部が欠損している。

16・17は、土師器の甕である。18は、須恵器（ＮＳ）の甕である。19は、須恵器（ＮＳ）の羽釜である。16・18は胴部中位以下、17・19は胴部下位以下が欠損している。

20・21は、土錘である。

22は、鉄製の釘である。

第２号溝（第642図）

Ｆ－１グリッドに確認した。

第１号溝の南から南（Ｎ－24°－Ｅ）に向かって延び、調査区外に続いていた。長さ3.8ｍ・幅0.９ｍ・深さ0.56ｍと狭く深かった。

延長線上に第１号溝が位置し、第１号区画溝と第７・８号溝が併走していた。

第３号溝（第642図）

Ｇ－１グリッドに確認した。

極く一部を調査区の東端に検出した。東西方向（Ｎ－112°－Ｅ）に延びるものと推定した。長さ1.9ｍ・幅0.7ｍ・深さ0.41ｍと狭く深かった。

第４・６・９号溝と平行する。

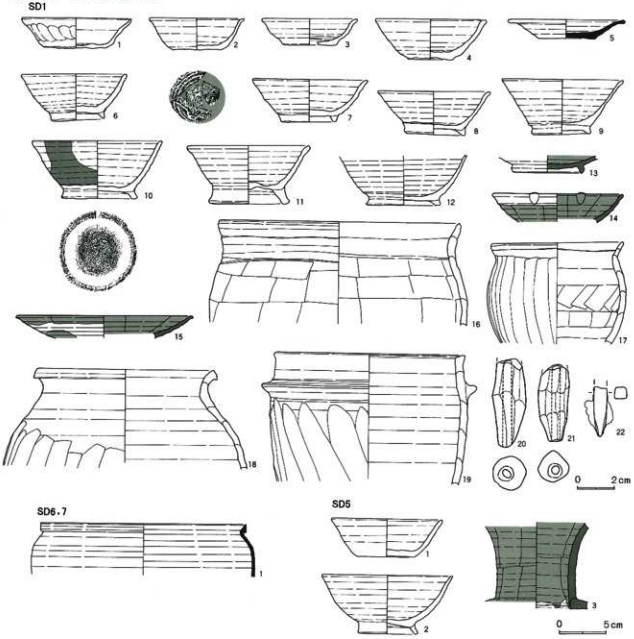
第４号溝（第642図）

Ｆ－１・２グリッドに確認した。

第１号溝と２号溝の間から東（Ｎ－123°－Ｅ）に向かって延びていた。長さ8.2ｍ・幅0.7ｍ・深さ0.24ｍと狭く浅かった。

第３・６・９号溝と併走していた。

第645図　溝出土遺物（1）



第5号溝（第642図）

C・D－2グリッドに確認した。

第1号溝の北側から北（N－14°－E）に向かって延びていた。南端を近世の溝に、北端を第8号土壙によって破壊されていた。長さ5.9m・幅1.1m・深さ0.17mと狭く浅かった。

延長線上に第1号溝が位置し、第1号区画溝、第7・8号溝と併走していた。

遺構の切り合い関係は、第8号土壙より古かった。

1は、須恵器（NS）の椀である。2は、須恵器（NS）の高台付椀である。3は、灰釉陶器の長頸壺である。3は頸部のみである。

第6号溝（第642図）

C－2、D－2・3グリッドに確認した。

第5号溝の中央付近から東（N－108°－Eに向かっ

第499表　第1号溝出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	輪積	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A Ⅳ	H	11.5	3.2		6.6	B, E, H	普通		黄橙	40	
2	椀	HS	9.9	3.3		5.2	B, C, E, G	良好		浅黄橙	90	D−2
3	椀	HS	10.0	2.8		5.5	B, E	良好		灰黄褐	20	E−1
4	椀	NS	11.7	4.3		4.8	B, E, G	良好		灰白	40	
5	椀	S	12.2	2.0		6.0	B	良好		灰	20	
6	皿	HS	11.1	5.0		5.3	B, C, E, G	良好		にぶい橙	100	
7	高台付椀	HS	12.1	4.6		5.6	B, E, G, I	良好		灰黄	100	
8	高台付椀	HS	11.8	4.5		6.0	B, E, I	良好		にぶい橙	70	
9	高台付椀	NS	12.8	5.9		5.8	B, E, G, I	普通		灰	80	
10	高台付椀	HS	13.7	6.1		7.7	B, E, I	良好		暗灰黄	60	
11	高脚高台付椀	HS	12.8	6.2		8.0	B, E, G	普通		にぶい黄橙	50	
12	高台付椀	NS				7.5	B, I	普通		灰白	40	
13	高台付椀	K				7.2	B, D	良好		灰白	20	被熱痕
14	高台付椀	K	13.8				B	良好		灰白	10	D−2
15	高台付皿	K	18.7				B	良好		灰白	10	E−1
16	土師甕A Ⅲ c	H	25.7				C, E	普通		浅黄橙	25	
17	甕 C	H	13.9				C, E, H	普通		橙	80	
18	甕	NS	18.8				B, E, H	普通		外−灰黄褐。内−浅黄橙	20	
19	羽釜B Ⅱ a	NS	19.9		3.1		B, E, H	良好		灰白	20	

第500表　第1号溝出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
20	にぶい橙	80		1.7	0.3	8.9	C 1	Ⅰc	225	
20	灰黄	70		1.8	0.5	12.0	C 1	Ⅱb	226	
21	黄橙	70		1.7	0.4	9.2	C 1	Ⅱb	227	

第501表　第5号溝出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	輪積	色調	残存	出土位置その他
1	椀	NS	11.7	4.1		6.1	B, E, I	普通		橙	100	
2	高台付椀	NS	13.8	6.2		6.0	B, E, I	普通		灰白	50	
3	長頸壺	K	13.6				B, D	良好		オリーブ灰	20	被熱痕

第502表　第6号溝出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	輪積	色調	残存	出土位置その他
1	鉢	S	21.9				B, E	良好		灰	5	

て）延びていた。長さ11.5m・幅1.1m・深さ0.19mと狭く浅かった。

第7号溝が東端付近から南に向かって延びていた。

第3・4・9号溝と併走していた。

遺構の切り合い関係は、第10号土壙より新しかった。

1は、須恵器（S）の鉢である。胴部下位以下が欠損している。

第7号溝（第642図）

D・E−3グリッドに確認した。

第6号溝の東端付近から南（N−23°−E）に向かって延びていた。長さ10.3m・幅0.9m・深さ0.74mと狭く深かった。

第1号区画溝、第1・2・5・8号溝と併走していた。

第８号溝（第642図）

Ｄ・Ｅ－３グリッドに確認した。

第７号溝の西側に位置し、2.5ｍの距離をもって南（Ｎ－19°－Ｅ）に向かって併走していた。長さ5.8ｍ・幅0.4ｍ・深さ0.12ｍと小規模で狭く浅かった。

第１号区画溝、第１・２・５・７号溝と併走していた。

第９号溝（第642図）

Ｅ－３・４グリッドに確認した。

中世の竪穴状遺構の床面下に検出した。第11号溝の北端から東（Ｎ－98°－Ｅ）に向かって延びていた。長さ5.0ｍ・幅0.6ｍ・深さ0.16ｍと狭く浅かった。

第３・４・６号溝と併走していた。

第10号溝（第642図）

Ｅ－３・４、Ｆ－３グリッドに確認した。

第３号掘立柱建物跡の北西隅から南（Ｎ－６°－Ｅ）に向かって延びていた。長さ9.4ｍ・幅0.4、深さ0.09ｍと狭く浅かった。

第３号掘立柱建物跡の西側に隣接し、棟行と平行していたことから、第３号掘立柱建物跡に付属する遺構（雨落ち溝？）と推定した。

第３号掘立柱建物跡のほか、第11・13号溝と併走していた。

第11号溝（第642図）

Ｆ－３グリッドに確認した。

第13号住居跡の北側から、北（Ｎ－４°－Ｅ）に向かって延びていた。長さ7.2ｍ・幅0.4ｍ・深さ0.10ｍと狭く浅かった。

第３号掘立柱建物跡の棟行、第10・13号溝と平行していた。

遺構の切り関係は、第13号住居跡より古かった。

第12号溝（第642図）

Ｅ－３・４グリッドに確認した。

第10号溝の北端から東（Ｎ－78°－Ｅ）に向かって延びていた。長さ5.5ｍ・幅0.4ｍ・深さ0.05ｍと狭くとても浅かった。

第12号溝の東への延長線上に第18号溝が位置していた。

遺構の切り合い関係は、第39号土壙より新しかった。

第13号溝（第642図）

Ｅ－４、Ｆ－５グリッドに確認した。

第３号掘立柱建物跡の身舎の北東隅から南（Ｎ－９°－Ｅ）に向かって延びていた。南端は、第40号土壙により破壊されていた。長さ5.9ｍ・幅0.6ｍ・深さ0.10ｍと狭く浅かった。

第３号掘立柱建物跡の棟方向、第10・11号溝と平行していた。

第14号溝（第642図）

Ｉ－４・５グリッドに確認した。

第１号掘立柱建物跡の第６号柱穴から西（Ｎ－93°－Ｅ）に向かって延び、西端は、第25・27号住居跡により破壊されていた。長さ8.2ｍ・幅0.6ｍ・深さ0.12ｍと狭く浅かった。

遺構の切り合い関係は、第１号掘立柱建物跡、第25・27号住居跡より古かった。

第15号溝（第642図）

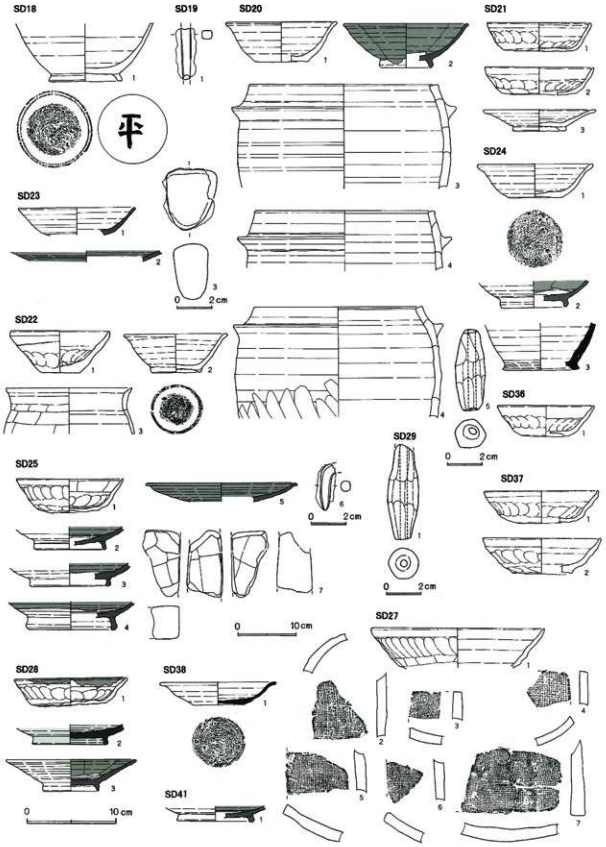
Ｊ－４グリッドに確認した。

第１号掘立柱建物跡の南西隅から北（Ｎ－５°－Ｅ）に向かって延び、北端は、第14号溝により破壊されていた。長さ9.6ｍ・幅0.3ｍ・深さ0.10ｍと狭く浅かった。

第１号掘立柱建物跡の西側に接し、棟行と平行していた。そのほか、第６号区画溝の南北溝と平行していた。

遺構の切り合い関係は、第27号住居跡より古く、第14号溝より新しかった。

第646図　溝出土遺物（2）



第16号溝（第642図）

G－5グリッドに確認した。

第12号掘立柱建物跡の東側から東（N－96°－E）に向かって延びていた。西端は、第12号掘立柱建物跡の第8号柱穴により破壊されていた。長さ3.5m・幅0.3m・深さ0.08mと狭くとても浅かった。

第10・11号掘立柱建物跡の北側にほぼ接し、棟行と平行していた。

遺構の切り合い関係は、第12号掘立柱建物跡より古かった。

第17号溝（第642図）

D－6グリッドに確認した。

第18号溝から北（N－11°－E）に向かって延びていた。南端は、第18号溝に破壊されていた。長さ2.2m・幅0.4m・深さ0.15mと狭く浅かった。

遺構の切り合い関係は、第18号溝より古かった。

第18号溝（第642図）

D・E－6グリッドに確認した。

第31号住居跡の北西隅から東（N－75°－E）に向かって延びていた。長さ7.8m・幅0.5m・深さ0.14mと狭く浅かった。

延長線上には第12号溝が位置していた。

遺構の切り合い関係は、第104号土壙より古く、第113号土壙より新しかった。

1は、須恵器（HS）の高台付椀である。底部外面に墨書「平」がみられる。口縁部が欠損している。

第19号溝（第642図）

F－6グリッドに確認した。

第8号掘立柱建物跡の南西隅から、南（N－5°－E）に向かって延びていた。北端は、第138号土壙により破壊されていた。長さ4.9m・幅0.6m・深さ0.08mと狭くとても浅かった。

遺構の切り合い関係は、第138号土壙より古かった。

1は、棒状鉄製品である。

第20号溝（第643図）

I－5・6・7グリッドに確認した。

第1号掘立柱建物跡の北東隅から東（N－98°－E）に向かって延びていた。長さ18.7m・幅0.6m・深さ0.24mとやや幅の広く浅かった。

第1号掘立柱建物跡の梁行、第2号掘立柱建物跡の桁行と平行していた。

遺構の切り合い関係は、第6号区画溝より新しかった。

1は、須恵器（HS）の椀である。

2は、灰釉陶器の高台付椀である。3は、須恵器（HS）の羽釜である。4は、須恵器（NS）の羽釜である。2は底部、3は胴部下位以下、4は胴部中位以下が欠損している。3は黒色の付着物が胴部内面に確認できる。タール状の付着物と考えられる。

第503表　第18号溝出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	穂糎	色調	残存	出土位置その他
1	高台付椀	HS				8.0	B, C, E, H	良好		灰白	100	墨書

第504表　第20号溝出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	穂糎	色調	残存	出土位置その他
1	椀	HS	12.2	4.4		5.8	B, E, G	良好		にぶい黄橙	20	
2	高台付椀	K	13.7	4.9		5.4	B	良好		灰白	20	被熱痕
3	羽B I	HS	20.8				B, C, E, H	良好		浅黄橙	20	
4	羽B II b	NS	19.9		3.0		B, D, H	良好		灰白	15	

第21号溝（第643図）

L－6グリッドに確認した。

第1・2号掘立柱建物跡付属した池を構成する第2号区画溝の南壁に接して、東（N－115°－E）に向かって延び、調査区外に続いていた。長さ3.4m・幅0.5m・深さ0.15mと狭く広かった。

1・2は、土師器の坏AⅣである。3は、須恵器（NS）の高台付皿である。2は底部が欠損している。

第22号溝（第643図）

D・E－7グリッドに確認した。

周辺は遺構が密集し、激しく重複していたため、確認に手間取った。

南端は、第36号住居跡により破壊されていた。北（N－5°－E）に向かって延び、調査区外に続いていた。長さ6.02m・幅0.8m・深さ0.36mとやや幅広く、深かった。

遺構の切り合い関係は、第36号住居跡より古く、第32・35号住居跡より新しかった。

1は、土師器の坏Bである。

2は、須恵器（HS）の高台付椀である。

3は、土師器の甕である。4は、須恵器（NS）の羽釜である。3は胴部中位以下、4は胴部下位以下が欠損している。

5は、土錘である。

第23号溝（第643図）

I・J－8グリッドに確認した。

第12号区画溝から北東（N－11°－E）に向かって延びていた。長さ10m・幅0.6m・深さ0.22mと狭く浅かった。

第14号区画溝、第24号溝と平行していた。

遺構の切り合い関係は、第214号土壙、第24号溝より古かった。

1は、灰釉陶器の高台付椀である。2は、灰釉陶器の段皿である。1・2は底部が欠損している。

3は、鉄塊である。

第24号溝（第643図）

J－7・8グリッドに確認した。

第23号溝の南端から、南（N－9°－E）に向かって延びていた。長さ5.8m・幅0.8m・深さ0.37mと短いがやや幅広く深かった。

第14号区画溝、第23号溝と平行していた。

遺構の切り合い関係は、第23号溝より新しかった。

1は、須恵器（NS）の椀である。

第505表　第21号溝出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	軸釉	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A Ⅳ	H	11.5	3.2		7.6	B, C, E, H	普通		黄褐	50	
2	坏 A Ⅳ	H	12.1	3.0		8.3	B, E, H	良好		黄褐	20	
3	高台付皿	NS	12.3	2.4		5.6	B, E, I	普通		灰黄	40	

第506表　第22号溝出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	軸釉	色調	残存	出土位置その他
1	坏 B	H	11.0	4.7		4.1	B, E, H	普通		黄橙	40	
2	高台付椀	HS	11.4	4.3		5.3	B, E, G, I	良好		にぶい黄橙	100	
3	甕 A Ⅲ c	H	14.0				B, E, H	良好		橙	15	
4	羽A I b イ	NS	18.8		2.1		D, E	良好		灰白	20	SD－44

第507表　第22号溝出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
5	にぶい橙	100	4.6	1.8	0.5	11.3	C 1	Ⅵa	228	

2は、灰釉陶器の高台付椀である。口縁部と底部が欠損している。

3は、須恵器（S）の長頸壺である。底部のみである。

第25号溝（第643図）

O－7グリッドに確認した。

第11号区画溝の西壁に接し、南（N－2°－W）に向かって延びていた。長さ6.6m・幅0.8m・深さ0.39mと狭くやや深かった。

第11・12号区画溝と平行していた。

第11号区画溝より古かった。

1は、土師器の坏AVである。

2から4は、灰釉陶器の高台付椀である。5は、灰釉陶器の高台付皿である。2から4は底部のみである。5は底部が欠損している。

6は、鉸の脚部破片である。

7は、凝灰岩の切石である。

第26号溝（第643図）

P－7グリッドに確認した。

第11号区画溝の南端から南（N－14°－E）に向かって延び、大半が調査区外に続いていた。長さ3.04m・幅0.7m・深さ0.40mと狭くやや深かった。

第27号溝（第643図）

Q－8、R－8・9グリッドに確認した。

第1号建物地業跡の南西隅から南（N－3°－E）に向かって延びていた。長さ7.9m・幅1.3、深さ0.07mと狭くとても浅かった。

第13号区画溝や第1号建物地業跡の西壁と平行していた。

1は、土師器の坏Bである。底部が欠損している。

2は、丸瓦である。3から7は、平瓦である。

第28号溝（第643図）

Q・R－11グリッドに確認した。

第2号建物地業跡と第3号建物地業跡の間に位置し、南（N－20°－W）に向かって延びていた。長さ

第508表　第23号溝出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鐸	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	高台付椀	K	12.9				B	良好		灰白	20	I－8 被熱痕
2	鉢皿	K	18.2				D	良好		オリーブ灰	20	I－8

第509表　第24号溝出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鐸	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	椀	NS	12.6	3.7		5.8	B, I	普通		灰白	60	
2	高台付椀	K				7.0	B	良好		灰白	20	
3	長頸壺	S				7.7	B, C	良好		褐灰	5	

第510表　第25号溝出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鐸	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏AV	H	11.8	3.7		5.3	B, E, H	普通		黄橙	60	O－7
2	高台付椀	K				7.5	B, D	良好		灰白（釉）浅黄	10	O－7
3	高台付椀	K				8.3	B, D	良好		灰白	5	O－7
4	高台付椀	K				9.2	B	良好		灰白	10	O－7
5	高台付皿	K	16.4				B	良好		灰白	20	O－7 被熱

6.5m・幅1.2m・深さ0.29mと狭くやや深かった。

1は、土師器の坏AⅣである。黒色の付着物が口縁部と底部内面に確認できる。油煙の痕跡と考えられる。

2は、緑釉陶器の高台付椀である。3は、灰釉陶器の段皿である。2は底部のみである。

第29号溝（第643図）

Q－11・12グリッドに確認した。

第40住居跡と第3号建物地業跡の間に位置し、西端は攪乱で破壊され、東（N－90°－E）に向かって延びていた。長さ6.5m・幅1m・深さ0.10mと狭く浅かった。

第40号住居跡の長軸方向、第3号建物地業跡の梁行と平行していた。

1は、土錘である。

第30号溝（第643図）

J・K－13グリッドに確認した。

第31号溝の中央部から、南（N－1°－E）に向かって延びていた。長さ9.9m・幅0.44m・深さ0.2mと狭く浅かった。

遺構の切り合い関係は、第387・395土壙、第38号掘立柱建物跡より古かった。

第31号溝（第643図）

K－12・13、J－13・14グリッドに確認した。

第19号区画溝から東（N－73°－E）に向かって延びていた。長さ18.6m・幅0.4m・深さ0.08mと狭くとても浅かった。

第17号区画溝、第36号掘立柱建物跡の梁行、第37・38号掘立柱建物跡の桁行と平行していた。

第32号溝（第643図）

I・J－13グリッドに確認した。

第19号区画溝と第152号住居跡の重複部から、南（N－26°－W）に向かって延びていた。長さ2.9m・幅0.2m・深さ0.06mと短くとても狭く浅かった。

第33号溝（第643図）

L－13グリッドに確認した。

第38号掘立柱建物跡の中央付近に位置し、北東（N－30°－E）に向かって延びていた。長さ3.5m・幅0.2m・深さ0.06mととても狭く浅かった。

遺構の切り合い関係は、第150号土壙より古かった。

第511表　第27号溝出土瓦観察表

番号	種類	焼成	凸面	凹面	側面
2	丸瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り
3	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	2面面取り
4	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	2面面取り
5	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り
6	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り
7	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り

第512表　第27号溝出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	輪轆	色調	残存	出土位置その他
1	坏B	H	19.3				B, E, H	普通		赤褐	20	

第513表　第28号溝出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	輪轆	色調	残存	出土位置その他
1	坏AⅣ	H	12.3	3.0		7.3	B, E, H	良好		黄橙	80	
2	高台付椀	M				7.7	B, D	良好		淡緑	10	
3	段皿	K	14.4	3.5		5.9	B, D	良好		灰白	20	

第514表　第29号溝出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
1	にぶい橙	90		1.7	0.4	12.3	C1	Ib	229	

第34号溝（第643図）

L－13グリッドに確認した。

第38号掘立柱建物跡の第４号柱穴の西側から、北（N－14°－W）に向かって延びていた。長さ8.6ｍ・幅0.3ｍ・深さ0.03ｍととても狭く浅かった。

第38号掘立柱建物跡の梁行と接しつつ平行していた。

遺構の切り合い関係は、第402号土壙より新しかった。

第35号溝（第643図）

J－14、K－14・15グリッドに確認した。

第35号掘立柱建物跡の南東隅から南（N－40°－W）に向かって延びていた。長さ6.9ｍ・幅0.5ｍ・深さ0.05ｍと狭くとても浅かった。

遺構の切り合い関係は、第430・475号土壙より新しかった。

第36号溝（第643図）

L－14グリッドに確認した。

第38号掘立柱建物跡の第１号柱穴の東側から、北（N－８°－W）に向かって延びていた。長さ5.0ｍ・幅0.3、深さ0.05ｍととても狭く浅かった。

第38号掘立柱建物跡の梁行と接しつつ平行していた。

１は、土師器の坏AⅥである。底部が欠損している。

第37号溝（第643図）

I－15グリッドに確認した。

第155号住居跡と大半が重複し、覆土も類似し、確認に手間取った。

第155号住居跡中央から北（N－10°－W）に向かって延び、調査区外に続いていた。長さ3.9ｍ・幅0.5ｍ・深さ0.14ｍと狭く浅かった。

遺構の切り合い関係は、第155号住居跡より新しかった。

１は、土師器の坏AⅥである。２は、土師器の坏Bである。１・２は底部が欠損している。

第38号溝（第643図）

L－15・16グリッドに確認した。

周辺の遺構は疎らだったが、砂利層が確認面のため、確認作業は困難であった。

第24号区画溝の南側に位置し、東（N－70°－E）に向かって延びていた。長さ5.4ｍ・幅0.4、深さ0.08ｍと短く狭くとても浅かった。

第23・24号区画溝と平行していた。

１は、須恵器（S）の皿である。

第39号溝（第643図）

N・O－16グリッドに確認した。

周辺の遺構は疎らだったが、砂利層が確認面であり、確認作業は困難であった。

第25号区画溝の西端付近に位置し、南（N－１°－W）に向かって延び、南端は、第526・527号土壙に破

第515表　第36号溝出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	軸釉	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A Ⅵ	H	10.7	3.4		4.9	B, D, H	普通		黄白	40	

第516表　第37号溝出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	軸釉	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A Ⅵ	H	12.7	3.6		5.8	B, E, H	普通		黄橙	30	
2	坏 B	H	13.0	4.0		6.7	B, E, H	普通		暗橙	40	砂

壊されていた。長さ8.6m・幅0.5m・深さ0.18mと狭く浅かった。

遺構の切り合い関係は、第526・527号土壙より古く、第25号区画溝より新しかった。

第40号溝（第643図）

P・Q－16・17グリッドに確認した。

第43号掘立柱建物跡の身舎の第1号柱穴から、北（N－4°－W）に向かって延びていた。二本の溝が接した形状で、長さ6.7m・幅1.8m・深さ0.17mとやや広く浅かった。

第43号掘立柱建物跡の身舎の柱筋に並ぶ柱穴を結ぶように位置していた。

第41号溝（第644図）

P－13、Q・R－14、S－14・15、T－15・16、U－16グリッドに確認した。

第22号区画溝から南東（N－28°－W）に向かって延びていた。掘り込みの浅い部分があり、一部途切れていたが、長さ63.0m・幅0.4m・深さ0.28mと狭く浅かった。

遺構の切り合い関係は、第172号住居跡、第494・495号土壙より古く、第129号住居跡、第22号区画溝より新しかった。

1は、灰釉陶器の高台付皿である。底部のみである。

第42号溝（第643図）

S－30・31、T－29・30グリッドに確認した。

調査区東端の第33号区画溝に接し、東（N－65°－E）に向かって延びていた。西端は、第258号住居跡により破壊されていた。

長さ19m・幅0.2m・深さ0.07mと狭く浅かった。

第33号区画溝と平行し、東端は第32号区画溝の南端まで延びていた。

集石列（第647図）

P・Q・R・S・T－20グリッドで確認した。

重機による表土除去作業中、遺跡全体を覆う火山灰混じりの黒色土中に、一部途切れながら長さ41.9m・幅0.19m・高さ0.4m検出した。

第194・202～207号住居跡、第631号土壙より新しく、これらの遺構埋没後に造られていた。遺構の切り合い関係や覆土の状況から、中世の遺構の可能性も捨てきれないが、第28号区画溝の南北溝、第55・58号掘立柱建物跡の棟行と平行していたことから、古代の区画と関連した遺構と判断した。

第517表　第38号溝出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	軸釉	色調	残存	出土位置その他
1	皿	S	12.7	2.5		5.6	B	良好		灰	70	M－15

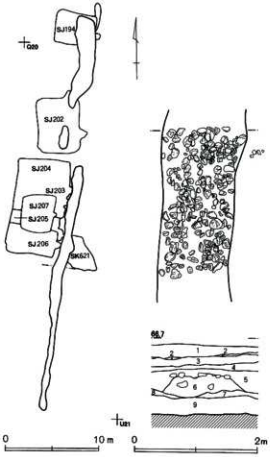
第518表　第41号溝出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	軸釉	色調	残存	出土位置その他
1	高台付皿	K				8.0	B	良好		灰白	10	P－13－2

第519表　集石列出土遺物観察表

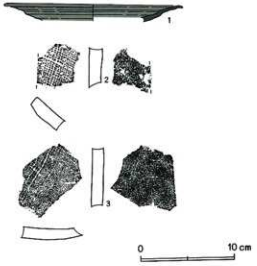
番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	軸釉	色調	残存	出土位置その他
1	段皿	K	18.1				B	良好		灰白	10	

第647図　集石列・出土遺物



集石列
1　褐色土　表土
2　暗褐色土　石片を多量に含む(表土)
3　灰黄褐色土　A軽石を少量含む(水田耕作土)
4　暗褐色土　A軽石を微量含む(鉄分沈着層)
5　黄褐色土　焼土粒子を少量含む
6　黒褐色土　焼土粒子、B軽石、砂利を少量含む
7　黒褐色土　焼土粒子を少量含み、B軽石を多量に含む
8　黒褐色土　焼土粒子を多量に含み、B軽石を層状に含む
9　暗褐色土　焼土粒子、砂利を多量に含む

SC1



第520表　集石列出土瓦観察表

番号	種類	焼成	凸面	凹面	側面
2	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	1面面取り
3	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	－

（5）柵列・道路跡・橋状遺構

中堀遺跡では、前章にあげた区画施設の他に、柵列・道路跡・橋状遺構等の施設を検出することができた。その遺構数は、柵列23列、道路状遺構２条、橋状遺構１本である。

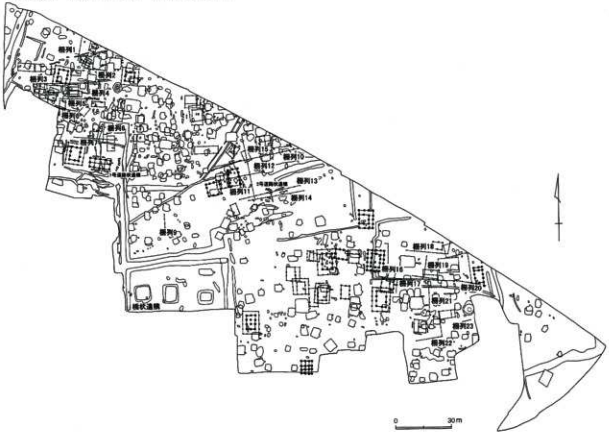
柵列は、調査区の全域から確認することができたが、区画全体に及ぶ例はなく、部分的な柱列として確認したに留まった。また柵列とするよりも、建物の目隠し塀的な小規模な柱列も存在した。

ここで道路状遺構とした遺構は、路面の痕跡とされる波板状の圧痕が残る部分のみを取り上げ、区画溝の片側や挟まれた部分については、取り上げなかった。遺跡内で道路と推定できる部分については、後述することとする。

また橋状遺構が、第12号区画溝内に１ヶ所確認できた。橋脚を据えた栗石が、区画溝の溝底に確認できた。遺跡内を通る道が、区画溝等の低い場所をわたる際には、橋が架けられたと推定できるが、橋脚を伴った橋を確認できたのは、１ヶ所だけであった。

柵列・道路跡・橋状遺構から出土した遺物は、遺構の性格もありきわめて少なく、わずかに土器片が出土した程度であった。

第648図　柵列・道路跡・橋状遺構全体図



第１号柵列跡（第649図）

Ｃ－５・Ｄ－５・Ｅ－５・６グリッドで確認した。

第５・６号掘立柱建物跡の西側に位置した。平面形は十字状で、南北方向はＮ－10°－Ｅ、長さ10.5ｍ。東西方向はＮ－93°－Ｅ、長さ7.9ｍであった。

柱穴の平面形は、円形または楕円形で、規模は径0.3ｍ～0.5ｍ・深さ0.1ｍ～0.54ｍであった。

南北方向柱筋が、第３・４号掘立柱建物跡の棟方向および第31号住居跡の長軸方向に平行し、東西方向柱筋が第３・４号掘立柱建物跡の桁方向、第２号柵列跡の東西方向柱筋と平行していた。

第２号柵列跡（第649図）

Ｅ－５・６グリッドで確認した。

第６号掘立柱建物跡の南側から東に向かって延び、第４号柱穴で小さく北に曲がる。平面形はＬ字状で、南北方向はＮ－２°－Ｅ、長さ５ｍ。東西方向はＮ－97°－Ｅ、長さ11.9ｍであった。

柱穴の平面形は円形で、規模は径0.2ｍ～0.5ｍ・深さ0.12ｍ～0.46ｍであった。

南北方向柱筋が、第３・４号掘立柱建物跡の棟方向および第31号住居跡の長軸方向に平行し、東西方向柱筋が第３・４号掘立柱建物跡の桁方向、第１号柵列跡の東西方向柱筋と平行していた。

第３号柵列跡（第650図）

Ｆ－３・４・５・６・７・Ｇ－３グリッドで確認した。

第１号井戸の北西付近から西に向かって延び、第８・９号柱穴および第18号柱穴で小さく曲がる。平面形はＬ字状で、東西方向はＮ－87°－Ｅ、長さ40.8ｍ。南北方向はＮ－２°－Ｗ、長さ2.1ｍであった。第１号柱穴からさらに南に向かって、調査区外に延びる可能性もある。

柱穴の平面形は、円形または楕円形で、第５号柱穴が方形であった。規模は径0.15ｍ～0.65ｍで、深さ0.13ｍ～0.42ｍであった。

東西方向柱筋は、南に位置した第９・10・12・13・14・18号掘立柱建物跡の柱筋、第４・５号柵列跡とほぼ平行していたことから、これらの建物群を区画する施設であったと思われる。

第３号掘立柱建物跡と重複するが、新旧関係は不明であった。

第４号柵列跡（第649図）

Ｇ－５・６グリッドで確認した。

第10号掘立柱建物跡の東側から東に向かって（Ｎ－86°－Ｅ）延びている。長さは7.4ｍと短い。

柱穴の平面形は、円形または楕円形で、規模は径0.15ｍ～0.45ｍ・深さ0.11ｍ～0.4ｍであった。

第３号柵列跡の東西方向柱筋、第５号柵列跡と平行していた。

第５号柵列跡（第649図）

Ｇ－４・５・６グリッドで確認した。

第20号掘立柱建物跡の北側から東に向かって（Ｎ－93°－Ｅ）延び、第４号柱穴で南に小さく曲がる。長さは15.2ｍであった。

柱穴の平面形は、円形または楕円形で、規模は径0.13ｍ～0.4ｍ・深さ0.16ｍ～0.4ｍであった。

第20号掘立柱建物跡の桁方向、第25号掘立柱建物跡の棟方向、第３号柵列跡の東西方向柱筋、第４号柵列跡と平行していた。

第６号柵列跡（第649図）

Ｇ－４・５グリッドで確認した。

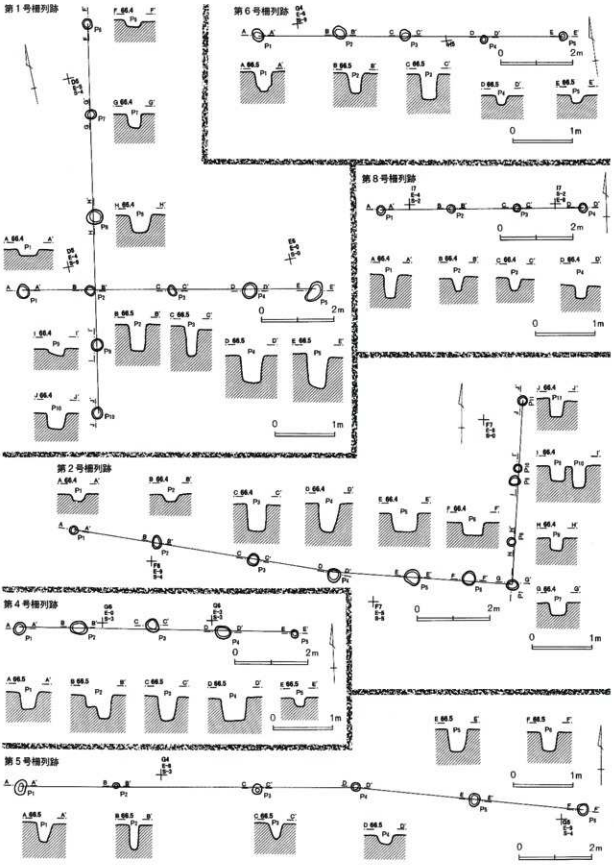
第22号掘立柱建物跡の北側柱筋を延長するように、東に向かって（Ｎ－98°－Ｅ）延びる。長さは8.2ｍと短い。

柱穴の平面形は円形で、規模は径0.15ｍ～0.4ｍ・深さ0.17ｍ～0.42ｍであった。

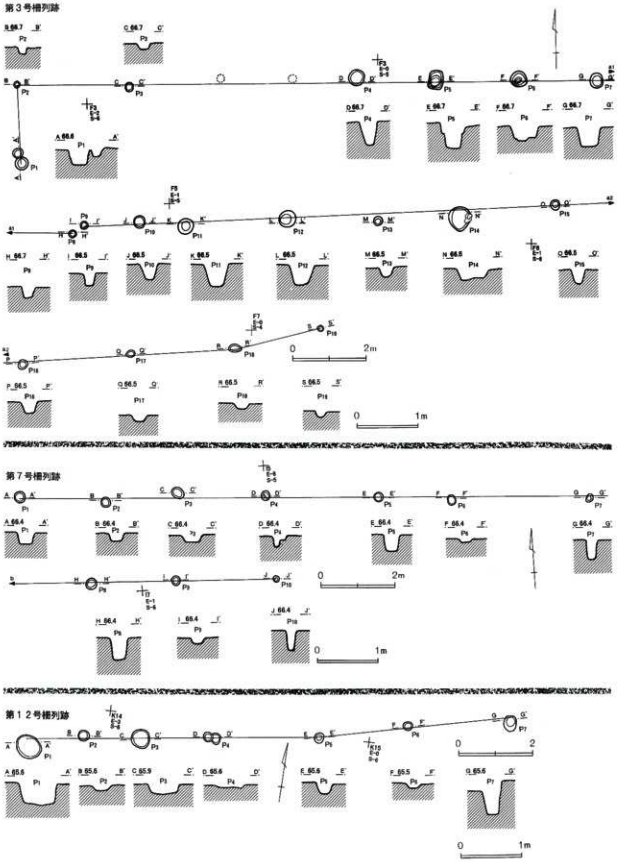
第７号柵列跡（第650図）

Ｉ－５・６・７グリッドで確認した。

第649図　柵列跡（1）



第650図　柵列跡（2）



第1・2号掘立柱建物跡の北側から、東に向かって（N－93°－E）延び、第12号区画溝の手前まで続く。長さは22.7mであった。

柱穴の平面形は円形で、規模は径0.2m～0.35m・深さ0.04m～0.38mであった。

第1号掘立柱建物跡の桁方向、第2号掘立柱建物跡の棟方向、第20号溝と平行していたことから、これらの遺構を区画する施設であったと思われる。

第8号柵列跡（第649図）

I－7グリッドで確認した。

第27号掘立柱建物跡の北西隅付近から、東に向かって（N－91°－E）延び、第12号区画溝の手前まで続く。長さは5.5mと短い。

柱穴の平面形は円形で、規模は0.2m～0.3m・深さ0.19m～0.38mであった。

第27号掘立柱建物跡の桁方向と平行していた。

第9号柵列跡（第651図）

M－9・N－9・10グリッドで確認した。

第118号住居跡の南側から、南に向かって（N－2°－W）延びる。長さは6.5mと短い。

柱穴の平面形は円形で、規模は0.4m～0.55m・深さ0.25m～0.35mであった。

第10号柵列跡（第652図）

J－12・13・14・15・16・17・K－12グリッドで確認した。

第19号区画溝と第31号溝の交点付近から、北東に向かって（N－77°－E）延び、調査区外に続くと思われる。長さ46.6mと長い。

柱穴の平面形は、円形または楕円形で、規模は径0.15m～0.7m・深さ0.07m～0.29mであった。

第37号掘立柱建物跡の棟方向、第38号掘立柱建物跡の桁方向、第20・21・23・24号区画溝、第31号溝、第12・13・14号柵列跡と平行し、第15号柵列跡と直交する。また、第11号柵列跡と斜めに交わる。

第11号柵列跡（第651図）

J－13・K－13・14・L－14グリッドで確認した。

第34号掘立柱建物跡の南東隅から南に向かって（N－25°－W）延び、第3号柱穴で小さく東に曲がる。長さは17.4mであった。

柱穴の平面形は、円形または楕円形で、規模は径0.35m～0.7m・深さ0.05m～0.45mであった。

第10・12号柵列跡と斜めに交わる。その他、第38号掘立柱建物跡と重複関係にあり、第38号掘立柱建物跡より古かった。

第12号柵列跡（第650図）

K－14・15グリッドで確認した。

第23号区画溝の西端から西に向かって（N－79°－E）延び、第5号柱穴で小さく北に曲がる。長さは12.9mであった。

柱穴の形状は円形で、規模は径0.2m～0.72m・深さ0.07m～0.47mであった。

第20・21・23・24号区画溝、第10・13・14号柵列跡と平行し、第15号柵列跡と直交する。また、第11号柵列跡と斜めに交わる。

遺構の切り合い関係は、第38号掘立柱建物跡より新しかった。

第13号柵列跡（第652図）

L－14・15・16・17グリッドで確認した。

第38号掘立柱建物跡の南東隅付近から、東に向かって（N－77°－E）延び、第5・7・8号柱穴で蛇行するように小さく曲がる。長さは29.1mであった。

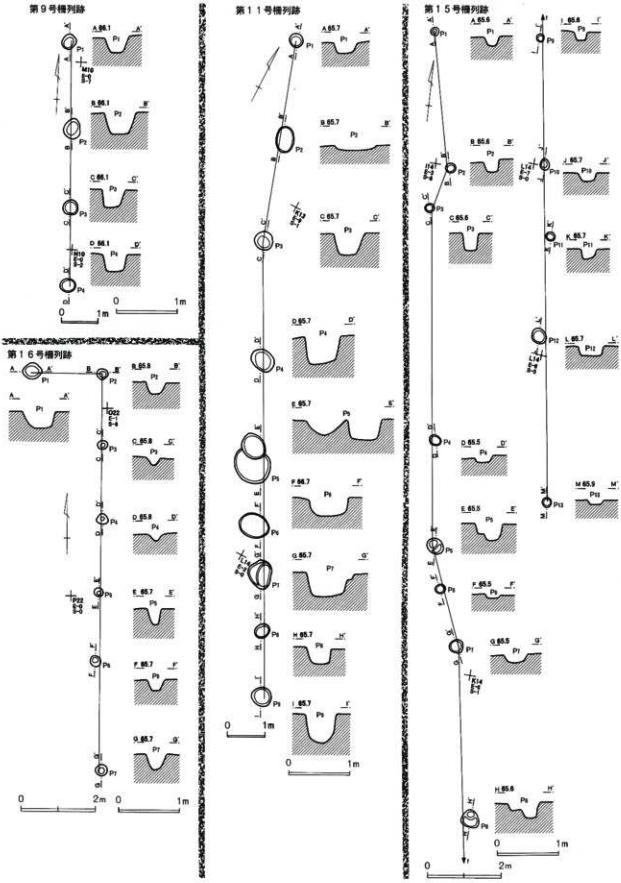
柱穴の平面形は、円形または楕円形で、規模は径0.15m～0.45m・深さ0.12m～0.39mであった。

第38号掘立柱建物跡の桁方向、第20・21・23・24号区画溝、第31・38号溝、第10・12・14号柵列跡と平行し、第15号柵列跡と直交する。

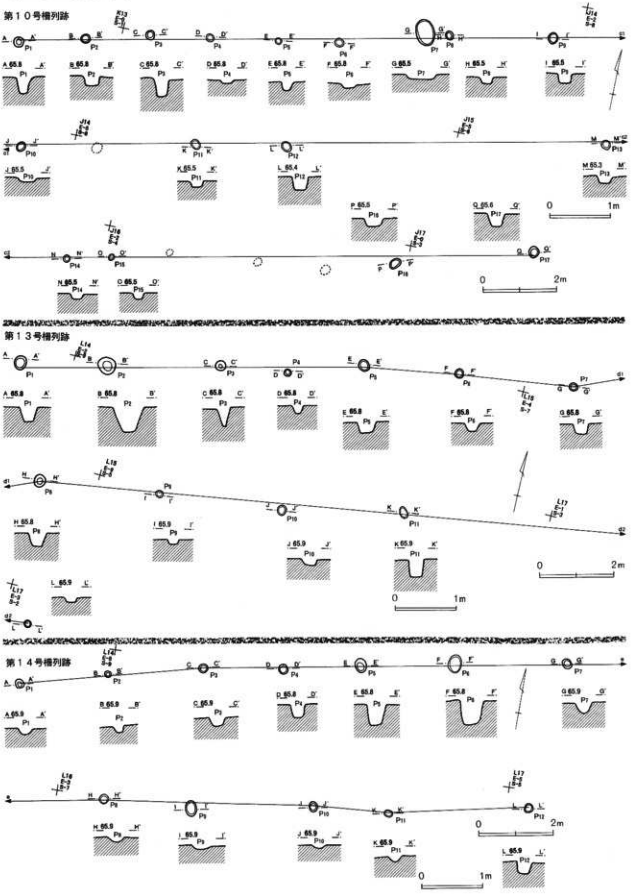
第14号柵列跡（第652図）

L－14・15・16・17グリッドで確認した。

第651図　柵列跡（3）

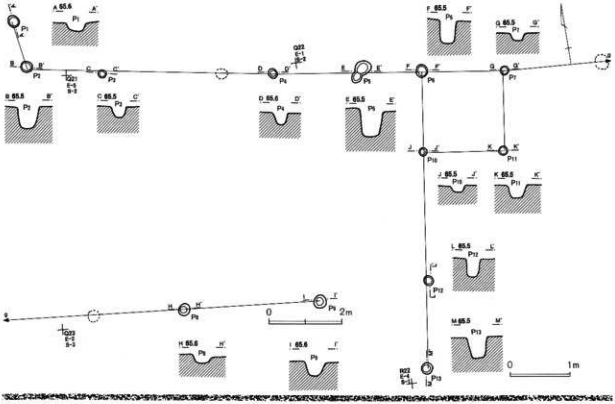


第652図　柵列跡（4）

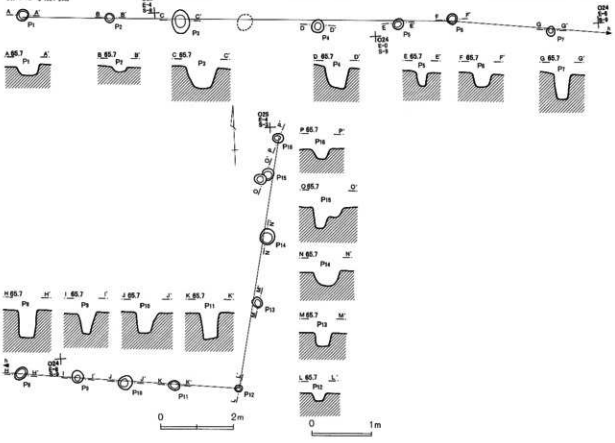


第653図　柵列跡（5）

第17号柵列跡



第18号柵列跡



第39号掘立柱建物跡の東側から、東に向かって（N－80°－E）延びる。長さは28mであった。

柱穴の平面形は、円形または楕円形で、規模は径0.15m～0.45m・深さ0.09m～0.38mであった。

第20・21・23・24号区画溝、第38号溝、第10・12・13号柵列跡と平行し、第2号柱穴と3号柱穴の間から第15号柵列跡が、北に向かってほぼ垂直に延びる。

第15号柵列跡（第651図）

I－14・J－14・K－14・L－14グリッドで確認した。

第14号柵列跡の第2号柱穴と3号柱穴の間から、北に向かって（N－12°－W）延び、第2・3・5・7柱穴で小さく曲がる。長さは35mであった。

柱穴の平面形は円形で、規模は径0.2m～0.5m・深さ0.05m～0.29mであった。

第38号掘立柱建物跡の棟方向と平行し、第10・12・13・14号柵列跡と直交する。

第16号柵列跡（第651図）

O－21・22・P－22グリッドで確認した。

第55号掘立柱建物跡の西側に位置し、平面形はL字状であった。南北方向はN－0°－E、長さ10.5mで、東西方向N－90°－E、長さ1.9mであった。

柱穴の平面形は円形で、規模は径0.22m～0.5m・深さ0.12m～0.33mであった。

第28号区画溝の南北方向と平行していた。また、第55号掘立柱建物跡の棟方向よりやや西に振れるが、位置関係から、第55号掘立柱建物跡と関連する遺構であると思われる。

第17号柵列跡（第653図）

Q－21・22・23・R－22グリッドで確認した。

第55号掘立柱建物跡の南側から、第28号区画溝の北壁に沿うように、東に向かって（N－94°－E）延び、第62号掘立柱建物跡の南西隅（第4号柱穴）につながる。

西端は北に向かって（N－8°－W）、長さ2.2mほど短く曲がる。東西方向は長さ24.4mで、第6号柱穴から南に向かって（N－8°－E）、ほぼ垂直に、長さ8mほど延びる。

また、第6・7・10・11号柱穴を結ぶように、1辺2.2mの方形区画を造る。

柱穴の平面形は円形で、規模は0.2m～0.4m・深さ0.13m～0.44mであった。

第62号掘立柱建物跡の南面柱筋につながり、その延長線上に第20号柵列跡が続く。また第28号区画溝の東西方向、第29号区画溝、第18号柵列跡の東西方向と平行していた。

第217号住居跡、第56号掘立柱建物跡と重複するが、新旧関係は不明であった。

第18号柵列跡（第653図）

O－23・24・25グリッドで確認した。

第217号住居跡の北側から、東に向かって延び、第6号柱穴で南に小さく曲がり、第12号柱穴で北にほぼ直角に曲がる。平面形はL字状で、東西方向はN－95°－E、長さ22.3m。南北方向はN－10°－E、長さ6.8mであった。

柱穴の平面形は、円形または楕円形で、規模は径0.2m～0.41m・深さ0.07m～0.42mであった。

東西方向柱筋は、第39号掘立柱建物跡の棟方向、第17号柵列跡の東西方向柱筋、第28号区画溝の東西方向、第29号区画溝と平行していた。

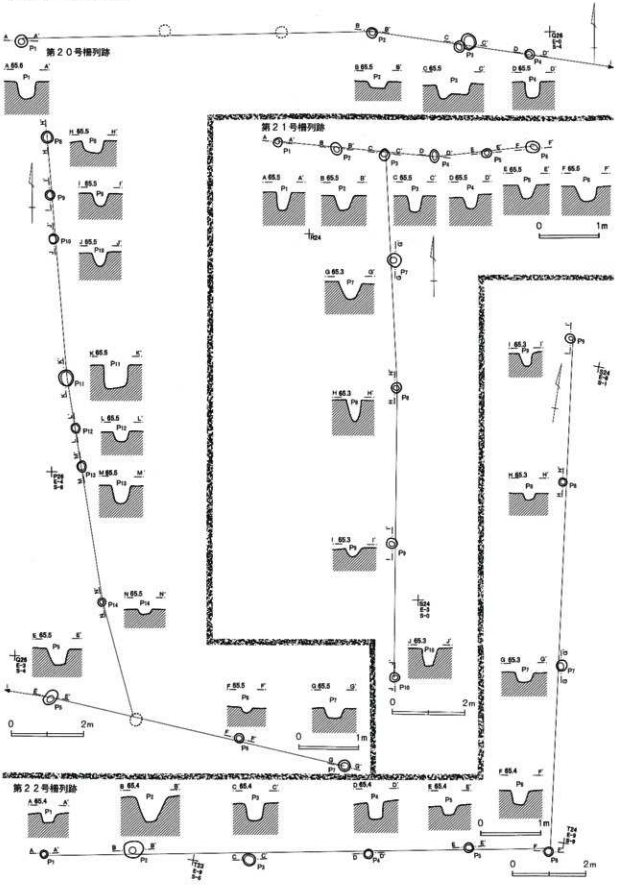
第19号柵列跡（第655図）

P－24・Q－23・24グリッドで確認した。

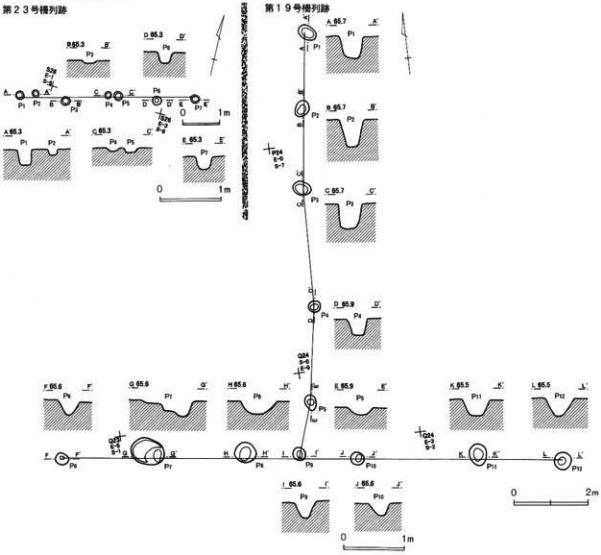
第18号柵列跡の6号柱穴の南から、南に向かって延び、第3・5号柱穴で小さく曲がり、第28号区画溝の手前で東西に分かれる。平面形はT字状で、南北方向はN－7°－E、長さ11.3m。東西方向はN－96°－E、長さ13.6mであった。

柱穴の平面形は、円形または楕円形で、規模は径0.35m～0.9m・深さ0.16mから0.39mであった。

第654図　柵列跡（6）



第655図　柵列跡（7）



南北方向柱筋が、第18号柵列跡の南北方向柱筋と平行していた。

第62号掘立柱建物跡と重複するが、新旧関係は不明であった。

第20号柵列跡（第654図）

O－26・P－26・Q－24・25・26・27グリッドで確認した。

第62号掘立柱建物跡の第１号柱穴から東に向かって延び、第２号柱穴で南に小さく曲がる。さらに第５号柱穴と第６号柱穴の間から、北に向かって延びる。平面形はT字状で、東西方向はN－95°－E、長さ23.4m。南北方向はN－8°－W、長さ15.9mであった。

柱穴の平面形は、円形または楕円形で、規模は径0.21m～0.45m・深さ0.09m～0.38mであった。

東西方向柱筋は、第62号掘立柱建物跡の南面柱筋につながり、西側の延長線上に第17号柵列跡が続くほか、第29号区画溝と平行していた。また、南北方向柱筋は、第30・31号区画溝、第65号掘立柱建物跡の棟方向と平行していた。

第65号掘立柱建物跡と重複関係にあるが、新旧関係は不明であった。

第21号柵列跡（第654図）

Q－23・Q－24・R－24・S－24グリッドで確認した。

第29号区画溝の南壁に沿って短く延び、第4号柱穴で北に小さく曲がる。さらに第3号柱穴から南に向かって延びる。平面形はT字状で、東西方向はN－92°－E、長さ6.9m。南北方向はN－1°－W、長さ14.1mであった。

柱穴の平面形は、円形または楕円形で、規模は径0.22m～0.4m・深さ0.08m～0.4mであった。

東西方向柱筋は、第28号区画溝の東西方向、第29号区画溝と平行していた。

第22号柵列跡（第654図）

S－24・T－23・24グリッドで確認した。

第64号掘立柱建物跡の北西隅から南に向かって延び、第6号柱穴で、西にほぼ直角に曲がる。平面形は逆L字状で、南北方向はN－7°－W、長さ13.7m。東西方向はN－80°－E、長さ13.6mであった。

柱穴の平面形は円形で、規模は径0.2m～0.53m・深さ0.1m～0.38mであった。

南北方向柱筋が、第64号掘立柱建物跡の桁方向と平行していた。

第23号柵列跡（第655図）

S－26グリッドで確認した。

第3号井戸の南側に位置した。東西方向（N－77°－E）に延びる。長さは4.6mと短いが、柱穴間の距離が短く、長さに比べて密であった。

柱穴の平面形は円形で、規模は径0.15m～0.28m・深さ0.05m～0.27mであった。

第64号掘立柱建物跡の棟方向、第22号柵列跡の東西方向柱筋と平行していた。

第1号道路状遺構（第656図）

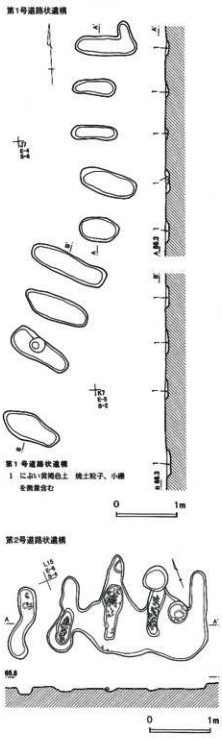
J－7・K－7グリッドで確認した。

第2号掘立柱建物跡と第12号区画溝の間に位置した。周辺は遺構が密で、覆土が地山に類似するため、確認に手間取った。

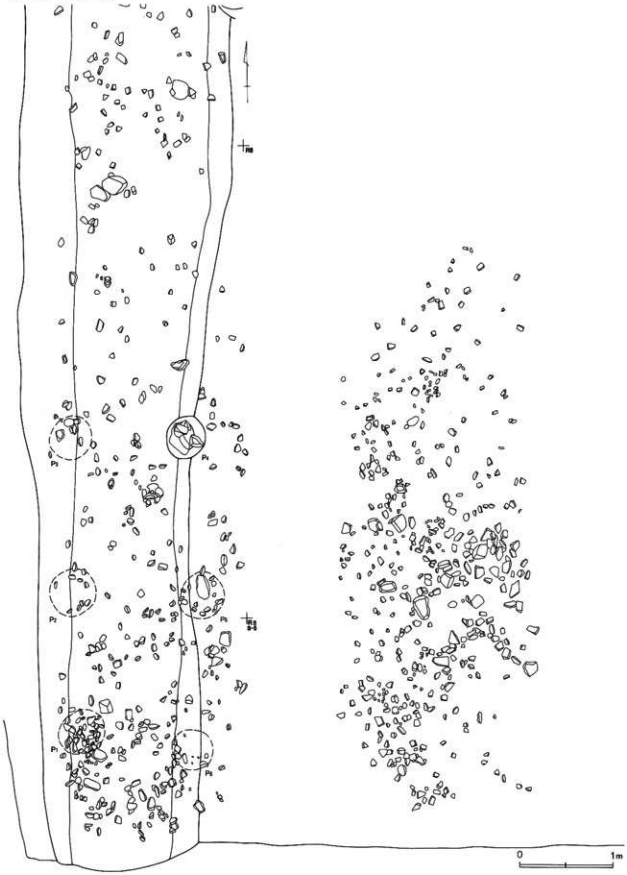
楕円形の浅い掘り込みが、波板状に検出されたことから道路跡と判断した。

検出された楕円形の掘り込みは9基で、規模は長軸

第656図　道路状遺構



第657図　橋状遺構



0.52m～1.25m・短軸0.21m～0.46m・深さ0.05mであった。

道路は掘り込みの短軸を結ぶ、南北方向に延びていたものと思われるが、北側5基の方向（N－5°－E）と、南側4基の方向（N－24°－E）が20°ほど振れることから、緩く蛇行していた可能性もある。

北側5基の道路方向は第12号区画溝の南北方向と平行し、南側4基の道路方向は第2号掘立柱建物跡の桁方向と平行していた。また、道路状の施設として使用されていたと思われる、第11号区画溝と第12号区画溝の間が、延長線上に位置した。

第2号道路状遺構（第656図）

L－15グリッドで確認した。

周辺は土壙、小穴などの遺構が密で、覆土が地山と類似することから確認に手間取った。

当初、浅い不整形な土壙と考えて調査を始めたが、5cmほど掘り下げたところ、楕円形の浅い掘り込みが波板状に検出され、覆土に多量の砂利を混入していたことから、道路状遺構と判断した。

検出された楕円形の掘り込みは5基で、規模は長軸1.14m～1.57m・短軸0.21m～0.6m・深さ0.03m～0.1mであった。

道路は掘り込みの短軸を結ぶ、東西方向（N－111°－E）に延びていたと思われるが、平行していた遺構はみられない。

橋状遺構（第657図）

R－7グリッドで確認した。

第13号区画溝の南端に位置した。

溝の覆土中には川原石が多量に混入していて、当初認識できなかったが、川原石が円形に抜けていたり（P2・3・6）、やや大形の川原石が、根石状に集中している部分（P1・4・5）が、溝の下場に沿って検出されたことから、橋脚であると判断した。

確認した橋脚は6基で、掘り方は検出できなかった。P2・5は橋の貫を支える橋脚と思われる。推定される橋の幅は3.1mであった。

橋脚間の距離はP1～P2が1.5m・P2～P3が1.6m・P4～P5が1.6m・P5～P6が1.7m・P1～P6が1.2m・P2～P5が1.35m・P3～P4が1.2mであった。

（6）土壙

分布について

中堀遺跡では787基の土壙が検出された。土壙の分布は調査区全体にみられるが、調査区北西の第1・2号掘立柱建物跡、第16号区画溝より北側、調査区南西の第29号区画溝より南側でやや密である。

逆に、分布密度が低いのは、第12・16号区画溝により構成される区画内と、1～3号建物地業跡周辺、第22号区画溝の東側である。

特徴的な土壙について

多量に検出された土壙の多くは、遺物が少なく、覆土も1層であるものが多く、性格の不明なものが多い。しかし、注目される土壙もみられる。

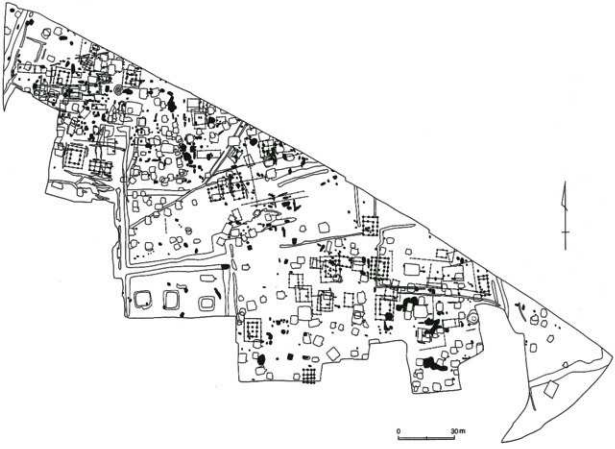
調査区北西端に位置する第13・15・19・24号土壙はいずれも円Ⅰ型（土壙の形状分類については後述）の土壙で、規模も類似する。配置も第24号土壙がやや北側にずれるが、規則的に東西に並んでいる。時期は遺物が少なく確定できないが、いずれも10世紀代の土壙であり、関連性が伺える。

また、鍛冶炉跡周辺でも特徴的な土壙が検出されている。

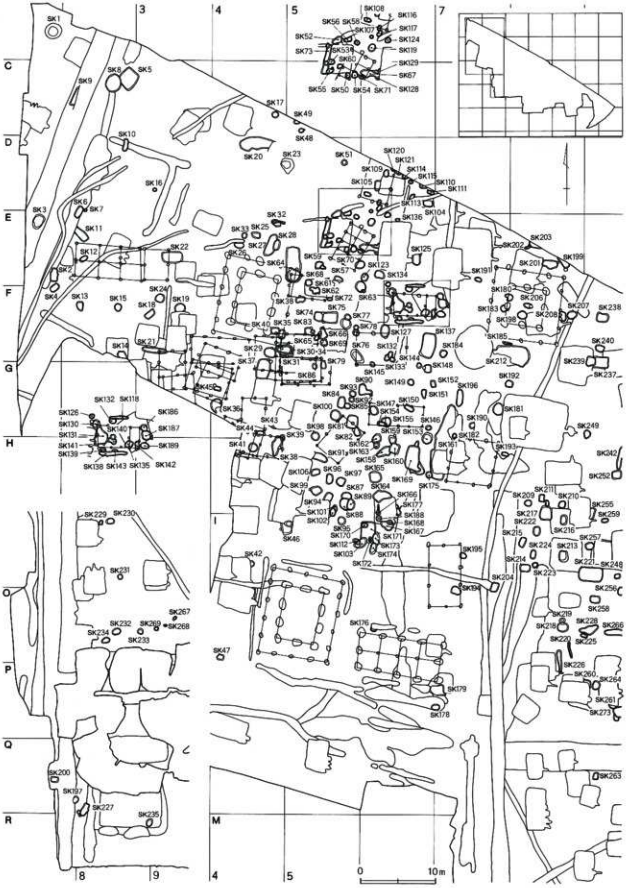
Q－7グリッドで確認された第200号土壙は、底面から丸太状の炭化材が多量に出土し、I、J－7グリッドで確認された第204号土壙、I－8グリッドで確認された第214・215号土壙、U－24グリッドで確認された第3土壙群のI土壙は、炭化材は出土していないが、いずれも多量の炭化物を覆土中に含み、覆土は黒褐色で、粘性がみられず砂質の土が主体となる。

特に第200・214・215号土壙は長方ⅠC型で、形態も類似する。また、第3土壙群には他にも、鉄滓や焼土を多量に含む土壙が検出されていて、土壙群の形成

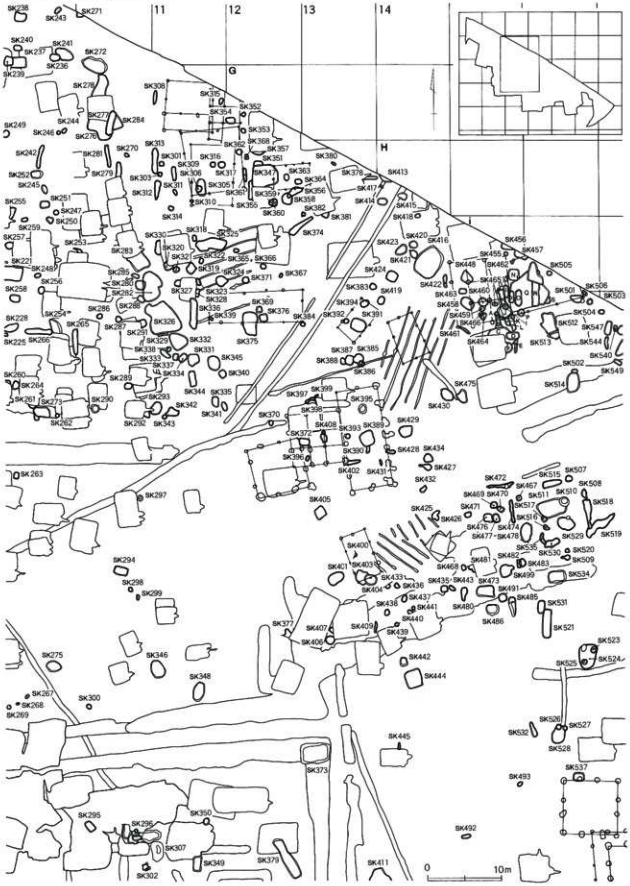
第658図　土壙全体図



第659図　土壙全体図詳細（1）



第660図　土壙全体図詳細（2）



第661図　土壙全体図詳細（3）

第662図　土壙全体図詳細（4）

第521表　土壙一覧表（第1号土壙～第51号土壙）

No.	グリッド	形　状	長径	短径	深さ	長軸角度	時　期	重複新	重複古	備　考
1	B－1	円　Ⅱ　C	2.18	2.09	0.44	N－12°－E	時期不明			
2	E－1	長 方 Ⅱ A	1.74	0.98	0.04	N－0°－E	時期不明			
3	E－1	楕 円 Ⅱ D	2.01	1.33	0.68	N－20°－E	Ⅶ		区画溝1	
4	E－1／F－1	長 方 Ⅰ B	1.34	0.86	0.30	N－52°－E	10世紀前半			
5	C－2	方　Ⅱ　C	2.54	2.29	0.55	N－42°－E	10世紀前半	SK8		
6	D－2／E－2	長 方 Ⅱ A	1.61	0.83	0.07	N－25°－E	時期不明			
7	D－2／E－2	円　Ⅰ　A	0.41	0.40	0.05	N－20°－E	時期不明			
8	C－2	円　Ⅱ　A	2.43	2.12	0.07	N－0°－E	時期不明		SK5. SD5	
9	C－2	不　明	2.50		0.41	N－15°－E	Ⅶ		区画溝1	
10	D－2	長楕円 Ⅱ B	1.68	0.57	0.12	N－7°－E	時期不明			
11	E－2	長　方　形		0.95	0.33	N－43°－W	Ⅶ	SD1		
12	E－2	長 方 Ⅰ B	1.12	0.55	0.23	N－50°－E	10世紀			
13	F－2	円　Ⅰ　B	1.07	0.95	0.21	N－1°－W	Ⅸ			
14	F－2	長 方 Ⅰ A	1.06		0.08	N－0°－E	時期不明			
15	F－2	円　Ⅰ　B	0.98	0.95	0.25	N－1°－W	10世紀			
16	D－3	円　Ⅰ　B	0.54	0.45	0.18	N－62°－W	時期不明			
17	C－4	円　Ⅰ　B	0.88	0.86	0.16	N－90°－E	時期不明			
18	F－3	長 方 Ⅱ A	1.53	1.16	0.05	N－50°－E	時期不明			
19	F－3	円　Ⅰ　C	1.44	1.36	0.38	N－29°－E	10世紀			
20	C－4／D－4	長 楕 円 形		2.07	0.08	N－72°－W	時期不明	SJ22		
21	F－3	長楕円 Ⅲ B	3.43	0.71	0.20	N－86°－W	時期不明			
22	E－3	長 方 Ⅱ B	2.77	1.45	0.28	N－84°－W	中世			
23	D－4	方　Ⅱ　D	1.75	1.64	1.00	N－55°－W	Ⅳ			
24	F－3	円　Ⅰ　C	1.20	1.20	0.44	N－29°－E	10世紀			
25	E－4	楕 円 Ⅰ B	1.27	0.85	0.25	N－77°－W	10世紀前半			
26	E－4	楕 円 Ⅰ B	1.33	0.85	0.12	N－89°－E	時期不明			
27	E－4	楕 円 Ⅲ A	3.03	1.29	0.10	N－24°－E	10世紀前半	SK28		
28	E－4	長 方 Ⅰ B	1.40	0.77	0.23	N－15°－E	時期不明		SK27	
29	F－4	円　Ⅰ　C	1.50	1.43	0.34	N－90°－E	時期不明		SK35	
30	F－4／F－5	楕 円 Ⅱ B	1.90	1.20	0.20	N－83°－E	時期不明		SK31	
31	F－4／F－5	楕 円 Ⅱ A	1.84		0.08	N－85°－E	時期不明	SK30		
32	E－4	不 整 Ⅰ B	1.24	0.73	0.23	N－62°－W	時期不明			
33	E－4	円　Ⅰ　B	0.84	0.69	0.13	N－23°－E	時期不明			
34	F－4／F－5	長楕円 Ⅱ B	2.55	1.09	0.25	N－72°－W	Ⅶ			
35	F－4	楕 円 Ⅰ B	1.26	0.98	0.28	N－2°－W	10世紀	SK29		
36	G－4	円　Ⅱ　B	1.87	1.50	0.16	N－2°－E	10世紀前半			
37	F－4／G－4	長　方　形		1.66	0.17	N－11°－E	9世紀後半	SJ14		
38	G－4／H－4	長楕円 Ⅱ B	2.81	1.07	0.29	N－	9世紀後半		SK39	
39	G－4／H－4	楕 円 Ⅰ B	0.76		0.15	N－0°－E	時期不明	SK38		
40	F－4	方　Ⅰ　B	1.08	0.86	0.13	N－87°－W	時期不明			
41	H－4	円　Ⅰ　C	1.18	1.14	0.34	N－90°－E	10世紀			
42	I－4	楕　円　形		1.02	0.37	N－87°－W	10世紀前半	SJ25		
43	G－4	不　明		0.61	0.30	N－69°－W	時期不明	SJ15		
44	G－4	長 方 Ⅰ A	1.06	0.70	0.10	N－90°－E	9世紀後半			
45	G－4	長 方 Ⅰ B	0.94	0.64	0.15	N－75°－W	10世紀			
46	I－4／I－5	長　方　形		1.32	0.30	N－20°－W	9世紀	SJ18		
47	J－4	方　Ⅰ　B	0.87	0.77	0.13	N－75°－W	Ⅴ			
48	C－5	不 整 Ⅰ B	0.77	0.58	0.15	N－62°－E	時期不明			
49	C－5	円　Ⅰ　A	0.76		0.09	N－65°－W	時期不明			
50	E－5	楕　円　形		0.70	0.05	N－0°－E	時期不明	SJ29		
51	D－5	円　Ⅰ　C	0.80	0.76	0.55	N－0°－E	時期不明			

第522表　土壙一覧表（第52号土壙～第100号土壙）

No.	グリッド	形　状	長径	短径	深さ	長軸角度	時　期	重複新	重複古	備　考
52	D－5／E－5	楕　円　形				N－	9世紀後半			
53	E－5	方　Ⅰ　D	0.85	0.74	0.84	N－89°－E	9世紀			
54	E－5	円　Ⅰ　C	0.91	0.82	0.35	N－22°－E	10世紀前半			
55	E－5	長　方　Ⅰ　B	0.91	0.71	0.22	N－64°－E	Ⅵ		SK73	
56	D－5／E－5	長　方　Ⅰ　B	1.00	0.67	0.26	N－65°－E	時期不明			
57	E－5	楕　円　Ⅱ　C	1.57	1.25	0.35	N－36°－E	時期不明			
58	E－5	円　Ⅰ　C	0.79	0.70	0.31	N－52°－W	時期不明			
59	E－5	方　Ⅰ　A	1.11		0.05	N－18°－E	時期不明			
60	E－5	長　方　Ⅰ　B	0.82	0.55	0.26	N－64°－E	時期不明			
61	E－5	方　Ⅰ　B	0.89	0.85	0.11	N－67°－E	Ⅵ			
62	E－5／F－5	不　整　Ⅰ　A	1.47	0.92	0.05	N－90°－E	時期不明			
63	E－5／E－6／F－5／F－6	円　Ⅱ　B	1.57	1.48	0.11	N－12°－W	時期不明			
64	E－5	長楕円Ⅲ　B	4.99	1.89	0.19	N－3°－E	時期不明			
65	F－5	楕　円　Ⅰ　C	0.84		0.33	N－28°－E	時期不明	SK66		
66	F－5	不　整　Ⅱ　C	1.69	0.96	0.31	N－0°－E	時期不明		SK65	
67	E－5／E－6	不　整　形		0.69	0.09	N－82°－W	Ⅴ	SJ31・SK128・SK129		
68	E－5	円　Ⅱ　C	2.12	2.11	0.34	N－18°－W	Ⅴ			
69	F－5	方　Ⅰ　B	0.97	0.82	0.14	N－25°－E	Ⅶ			
70	E－5／E－6	楕　円　形		0.93	0.04	N－57°－E	10世紀			
71	E－5／E－6	円　Ⅰ　A	0.79	0.58	0.07	N－54°－W	10世紀			
72	F－5	長　方　Ⅰ　B	0.75	0.45	0.25	N－72°－W	10世紀前半			
73	E－5	長楕円Ⅲ　B	4.09	0.53	0.11	N－12°－E	10世紀前半	SK55		
74	F－5	方　Ⅰ　C	1.25	1.19	0.35	N－15°－E	10世紀前半		SK75	
75	F－5	長　方　形		1.55	0.08	N－81°－W	9世紀	SK74		
76	F－5	楕　円　Ⅱ　B	2.20	1.28	0.26	N－46°－W	Ⅶ			
77	F－5	不　整　Ⅱ　B	1.96	1.04	0.24	N－15°－E	時期不明			
78	F－5	不　整　形		0.78	0.16	N－31°－W	10世紀			
79	F－5／G－5	長　方　Ⅰ　B	1.07	0.72	0.28	N－0°－E	時期不明			
80	F－5	長　方　Ⅰ　B	1.27	0.76	0.14	N－73°－E	時期不明			
81	G－5	方　Ⅱ　B	1.71	1.40	0.30	N－10°－E	9世紀		SK82	
82	G－5	長　方　形		0.83	0.22	N－29°－W	時期不明	SK81		
83	F－5	長　方　形		1.30	0.24	N－0°－E	10世紀			
84	G－5	長　方　Ⅱ　C	1.58	1.01	0.35	N－0°－E	時期不明	SK85		
85	G－5	方　Ⅰ　B	0.87		0.28	N－0°－E	9世紀		SK84	
86	G－5	方　Ⅰ　B	0.69	0.59	0.28	N－0°－E	時期不明			
87	H－5	円　Ⅰ　B	1.49		0.27	N－82°－W	時期不明	SK88・SK89		
88	H－5	方　Ⅱ　C	2.03	1.66	0.46	N－83°－W	時期不明	SK89	SK87	
89	H－5	楕　円　形		1.21	0.48	N－16°－E	時期不明		SK87・SK88	
90	G－5／G－6	不　整　Ⅱ　B	1.80	1.78	0.28	N－88°－W	9世紀			
91	H－5	長　楕　円　形		1.11	0.08	N－89°－E	時期不明			
92	G－5	円　Ⅰ　B	0.87	0.81	0.26	N－21°－E	時期不明			
93	G－5	円　Ⅰ　C	0.76	0.74	0.37	N－62°－W	時期不明			
94	H－5	長　方　形		0.98	0.11	N－25°－E	時期不明			
95	I－5	円　Ⅰ　B	1.10	1.07	0.25	N－90°－E	時期不明			
96	H－5	楕　円　Ⅰ　C	1.35	0.94	0.40	N－0°－E	時期不明			
97	H－5	円　Ⅰ　B	1.31	1.19	0.11	N－89°－E	時期不明			
98	G－5／H－5	円　Ⅰ　B	1.04	1.04	0.14	N－45°－W	10世紀前半			
99	H－5	円　Ⅱ　B	1.54	1.26	0.19	N－0°－E	時期不明			
100	G－5	円　Ⅰ　C	1.42	1.27	0.31	N－0°－E	時期不明			